宮崎市文化財調査報告書　第78集

下北方塚原第１遺跡

個人住宅建設に伴う文化財発掘調査報告書

2010

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書第 78 集「下北方塚原第 1 遺跡」正誤表

頁・行	誤	正
5 ページ 4 、 5 行目	「下北方塚原遺跡群」	「下北方遺跡群」
表紙・中表紙・序文・奥付	「個人住宅」	「共同住宅」

宮崎市文化財調査報告書　第78集

下北方塚原第１遺跡

個人住宅建設に伴う文化財発掘調査報告書

２０１０

宮崎市教育委員会

序　文

本書は、個人住宅建設に伴い平成20年度に実施された、下北方塚原第1遺跡発掘調査の報告書です。

下北方塚原第1遺跡が所在する下北方台地は、県指定史跡である下北方古墳群をはじめ、非常に数多くの遺跡が存在しています。宮崎市の中でも特に遺跡が多く、まさに台地上すべてが遺跡であるといっても過言ではないような地域です。また、景清伝説の残る景清廟や皇宮神社なども存在し、歴史的な雰囲気を強く感じさせる土地でもあります。

今回調査された下北方塚原第1遺跡からは、今からおよそ1500年前頃にあたる古墳時代の地下式横穴墓や、それよりも若干新しい時代にあたる古代の溝状遺構、土坑、掘立柱建物などが見つかりました。また、それに伴って土器、古代瓦、鉄器など多くの遺物が出土しました。これらは、遺跡の所在する下北方地区の歴史だけでなく、宮崎市の歴史を考える上で非常に貴重な文化遺産です。

これらの調査成果をまとめた本書が、市民の皆様に広く活用され、われわれの住む宮崎市の歴史や文化についてご理解いただく一助となれば幸いです。

宮崎市教育委員会
教育長　田原健二

例　言

1　本書は、宮崎市教育委員会が平成 20 年度に実施した下北方塚原第1遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は平成 20 年 10 月 31 日から平成 20 年 12 月 25 日までの期間実施した。整理作業は平成 21 年 2 月 12 日から平成 21 年 3 月 13 日、及び平成 21 年 5 月 12 日から平成 21 年 10 月 13 日の期間実施した。

3　調査組織

調査主体	宮崎市教育委員会		
	調査総括	文化財課長	小掠　聖
		主幹兼埋蔵文化財係長	山田　典嗣
	調査事務	主　　査	松崎　留美
	調査担当	技　　師	西嶋　剛広
		嘱　　託	島井　伸幸
	補助員	嘱　　託	菊地ひろみ、徳丸理奈
現場作業員			
整理作業員			

4　本書の執筆、編集は西嶋がおこなった。

5　掲載した図面のうち、現場における実測は西嶋、島井が現場作業員の協力を得ておこなった。遺物の実測は西嶋、菊地、徳丸が整理作業員の協力を得ておこなった。

6　現場、及び出土遺物の写真撮影は西嶋、島井がおこなった。

7　本書の図で示す方位記号はすべて真北を示す。

8　本書においては、地下式横穴墓の竪坑及び玄室の前後左右については以下のように呼称する。
竪坑：羨門にむかって、前を竪坑前壁、後を竪坑後壁、左右をそれぞれ竪坑左壁、竪坑右壁
玄室：竪坑側から玄室をみた場合の左右

9　本調査における出土遺物、実測図、撮影写真などはすべて宮崎市教育委員会で保管している。これら資料の有効な活用を望む。

本 文 目 次

第Ⅰ章　遺跡周辺の環境
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査の経過
第１節　調査に至る経緯 …… 5
第２節　調査の経過 …… 5

第Ⅲ章　調査の成果
第１節　調査成果の概要 …… 6
第２節　古墳時代の遺構と遺物
１．地下式横穴墓 …… 7
２．Pit …… 16
第３節　古代の遺構と遺物
１．堀立柱建物 …… 17
２．溝状遺構 …… 18
３．土坑 …… 19
４．Pit …… 25
５．Pit内出土遺物 …… 25
第４節　時期不明の遺構
１．住居跡 …… 26
２．土坑 …… 26
３．土坑墓 …… 28
第５節　遺構外出土遺物 …… 29

第Ⅳ章　まとめ
第１節　下北方地下式横穴墓群における地下式横穴墓受容形態 …… 33
第２節　溝状遺構出土の鉄器製作関連遺物について …… 35

挿 図 目 次

第１図　周辺の遺跡 …… 2
第２図　調査地位置図 …… 3
第３図　調査区配置図 …… 5

第４図　Ⅰ区平面図 …… 6
第５図　Ⅱ区平面図 …… 7
第６図　下北方19号地下式横穴墓 ……11・12
第７図　下北方19号地下式横穴墓出土遺物 …… 13
第８図　下北方20号地下式横穴墓 …… 14
第９図　下北方20号地下式横穴墓出土遺物（1） …… 15
第10図　下北方20号地下式横穴墓出土遺物（2） …… 16
第11図　Pit１、Pit１出土遺物 …… 16
第12図　掘立柱建物 …… 17
第13図　溝状遺構１、溝状遺構１出土遺物 …… 18
第14図　溝状遺構２、溝状遺構２出土遺物 …… 20
第15図　溝状遺構２出土遺物 …… 21
第16図　土坑１・２・３・４・５、土坑４出土遺物 …… 23
第17図　土坑６・７・８・９、土坑９出土遺物 …… 24
第18図　Pit２、Pit２出土遺物 …… 25
第19図　Pit内出土遺物 …… 26
第20図　時期不明遺構（1） …… 27
第21図　時期不明遺構（2） …… 28
第22図　遺構外出土遺物 …… 30
第23図　下北方地下式横穴墓群分布図 …… 34

表　目　次

第１表　遺物観察表（1） …… 31
第２表　遺物観察表（2） …… 31
第３表　遺物観察表（3） …… 32
第４表　遺物観察表（4） …… 32
第５表　下北方地下式横穴墓群一覧表 …… 34

図　版　目　次

図版１～９　現地調査 …… 38
図版10～15　出土遺物 …… 47

第Ⅰ章　遺跡周辺の環境

第1節　地理的環境

下北方塚原第1遺跡は宮崎市街地北西部の台地上、下北方町塚原に位置する。台地は、平和台公園がある越ヶ迫丘陵から南に向かって派生した標高約 20m から 30mの台地である。上面は平坦な地形をなしており、地名を冠して下北方台地と通称されている。下北方台地は、宮崎層群を基盤とし、その上位に礫層、火山灰層が堆積している。

下北方台地西側には、都城盆地周辺に源を発し、都城盆地、宮崎平野を貫流して太平洋へと注ぐ大淀川が流れている。大淀川は宮崎平野部で幾度か流れの向きを変えるが、遺跡の所在する下北方台地西側も、ちょうど大淀川が東から南へと流れを変える地点にあたる。

調査地は、この下北方台地の中心付近に位置しているが、当地は台地の北側から尾根状に延びる微高地状地形の端部付近であり、北側以外の三方から見れば、わずかに高まった場所にあたる。

第2節　歴史的環境

宮崎市には全域に多数の遺跡が存在するが、特に台地上や海岸沿いに発達した砂丘列上に集中して見られる傾向がある。中でも、下北方塚原第1遺跡が位置している下北方台地上は遺跡の分布密度が濃い地域であり、台地全体に遺跡が存在するといっても過言ではなく、現在台地上の大部分を一括して「下北方遺跡群」と呼称している。

現在のところ下北方台地上において認められる最古の遺跡は、旧石器時代の剥片尖頭器、三稜尖頭器、縄文時代早期、中期、後期の土器が出土した下郷遺跡である。下北方台地上において、当該時期に位置づけられる遺跡はこれ以外には確認されておらず、その様相はあまり明らかになっていない。

弥生時代中期から後期には、上述の下郷遺跡で環濠集落が営まれ、非常に多くの遺物が出土した。中でも、土器表面に線刻で絵が描かれた絵画土器には注目される。下郷遺跡から東の台地下には、垣下遺跡がある。弥生時代前期末から中期初めの溝状遺構や、旧河道が検出され、木製農具や、漁労具である筌が検出された。加えて、炭化米が付着した土器が出土したこと、イネのプラントオパールが検出されたことなどから、当該地において弥生時代に稲作がおこなわれていたことが明らかになっている。

古墳時代前期には、大淀川対岸の丘陵上に位置する生目古墳群で大型古墳が築造されるが、中期になると、下北方台地上で「下北方古墳群」の築造が開始され、以後、後期まで古墳の築造が続く。この周辺には多くの地下式横穴墓が点在しており、中でも金製垂飾付耳飾をはじめ多くの副葬品が出土した下北方5号地下式横穴墓は当地域の古墳時代墓制のあり方を考える上で重要な情報を提供した。また、後期になると台地北側の谷部に、上北方横穴群など多くの横穴群が形成される。これに対し、集落の様相はあまり明らかになっていないが、下郷第4遺跡からは、古墳時代中期に位置づけられる住居跡が2軒検出されており、台地上に古墳時代集落が存在したことは明らかであろう。

古代においては、上述の下郷第4遺跡において、カマドを持つものを含む住居跡や、掘立柱建物跡、溝状遺構が検出されている。また、下北方台地上のいくつかの地点において、凸面に格子目タタキが施された古代瓦が表面採集されていたことから、官衙関連遺跡の存在が示唆されてきたが、平成 21 年度の調査において、大型の掘立柱建物などの遺構や多量の古代瓦などの、官衙

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	下北方遺跡群	7	宮崎城	13	船塚古墳	19	石ノ迫遺跡
2	竹篠城	8	池内横穴墓群	14	宮大農園遺跡	20	石ノ迫第2遺跡
3	野首遺跡	9	八畝田遺跡	15	船塚遺跡	21	跡江城
4	瓜生野横穴墓群	10	下北方14号墳	16	生目古墳群	22	跡江貝塚
5	笠置遺跡	11	下北方13号墳	17	大屋敷遺跡	23	間越遺跡
6	柏田貝塚	12	垣下遺跡	18	堂原遺跡	24	平岩遺跡

第1図　周辺の遺跡（S＝1：25000）

第2図　調査地位置図（S＝1：5000）

関連遺構と判断するに足る遺構、遺物が検出された。このことは、今後の周辺の古代における様相を考える上で非常に重要な成果であった。

下北方台地上における中世の様相は明らかでない部分が多い。ただし、下北方台地北方の丘陵上には、宮崎城が存在する。宮崎城にかんする記録のうち初出のものは建武3(1336)年のもので、以後、長く伊東氏と島津氏の宮崎平野の支配権を巡る抗争の舞台となったが、豊臣秀吉による国割後は、下北方台地を含む宮崎城周辺は延岡を支配した高橋氏領となり、元和元（1615）年の一国一城令によって廃城となる。宮崎城にかんして注目されるのは、島津時代の城主であった上井覚兼による『上井覚兼日記』である。この詳細な内容は、当時の習俗、城内の様子を知る上での貴重な史料となっている。

近世においても、下北方台地周辺は延岡藩の飛び地となっており、その間、延岡藩代官所が置かれた。この代官所は現在大宮中学校が所在する場所にあったとされ、下北方台地が当該時期においても宮崎平野の政治的中心地の一つであったことがわかる。

近現代においては政治の中心地は現在の中心市街地に移っていき、下北方台地はその歴史的重要性を失っていくかに見える。しかしながら、台地北側の越ヶ迫丘陵上には昭和 15（1940）年に平和の塔（八紘一宇の塔）が、神武天皇の寓居跡とされる皇宮神社には皇軍発祥の地碑が建立された。これらは、その歴史的位置付けは別としても、近現代日本史を考える上での重要な位置を占めるものということができよう。

以上、下北方台地及びその周辺を含めた歴史的環境を概観した。様相がある程度明らかな弥生時代以降、下北方台地、及びその周辺には、各時代における宮崎平野の代表的な遺跡が多く存在していることがわかる。このことから、下北方台地周辺は、現代に至るまでの長い間宮崎平野の中心的な位置を占めていた地域のひとつであったと判断できる。したがって、当該地域は、宮崎平野の歴史を考える上で、きわめて重要な地域であるということができる。

第Ⅱ章　調査にいたる経緯と調査の経過

第1節　調査に至る経緯

平成20年7月28日、アパート建設に伴い、宮崎市下北方町塚原5835番3の一部外における埋蔵文化財所在の有無について照会がなされた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「下北方塚原遺跡群」の城内にあたるため、平成20年8月21日、9月9日から11日、10月2日から3日の計6日間にわたって、埋蔵文化財の有無を確認するための調査をおこなった。その結果、調査地内から、遺物包含層、ピット、これらに伴う遺物が確認された。また、すでに遺構面まで撹乱が及んでいる箇所も確認された。そのため、事業者と埋蔵文化財の取り扱いにかんする協議を重ね、建物建築に伴って、遺構面まで掘削の及ぶ範囲のうち、遺構が存在していると判断される395㎡を対象として本発掘調査を実施することとなった。現地での発掘調査は平成20年10月31日から平成20年12月25日までの期間実施した。現地調査終了後の整理作業は平成21年2月12日から平成21年3月13日および、平成21年5月12日から平成21年10月13日までの期間実施した。

第2節　調査の経過

現地における調査は、調査地のうち、遺構が存在すると判断された2箇所をそれぞれⅠ区、Ⅱ区として調査区を設定し、合計395㎡を調査した。

調査地内への機材搬入の後、調査地への座標移動、重機を用いての表土除去作業をおこなった。その後、各調査区ともに発掘作業員により、全体を精査し、撹乱土除去と包含層を掘削をおこなった後に、遺構検出作業をおこなった。Ⅰ区は、大規模な削平により、表土、撹乱土直下が地山である暗褐色ローム層であった。そのため、包含層は残存せず、すぐに遺構掘削に着手した。Ⅱ区は包含層である黒色土以下が良好に残存しており、包含層掘下げの後に全体を精査し遺構検出作業をおこなった。遺構掘削は調査員及び発掘作業員によりおこない、掘削した遺構から順次、記録作業をおこなった。記録作業は、手測りによる実測作業、及び、トータルステーションによる遺構実測作業、フィルムカメラ、デジタルカメラによる写真撮影によった。

これら記録作業の終了後には、機材の撤収作業をおこなった。その後、重機による埋め戻し作業を2日間おこなって、調査地を調査前の状況に復旧し、現地における調査を終了した。

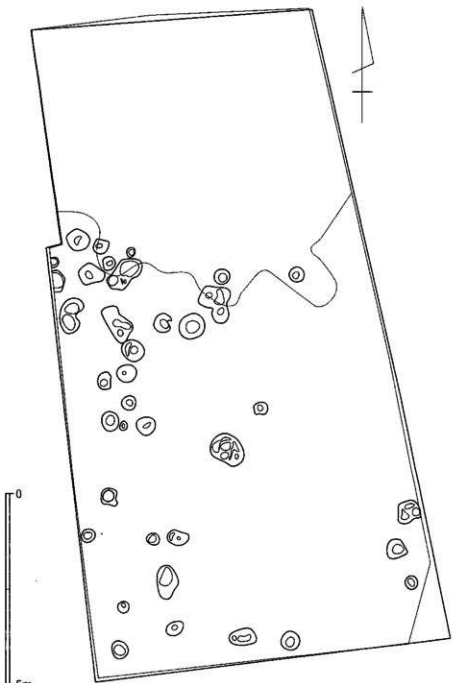
第3図　調査区配置図（S＝1：2000）

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査成果の概要

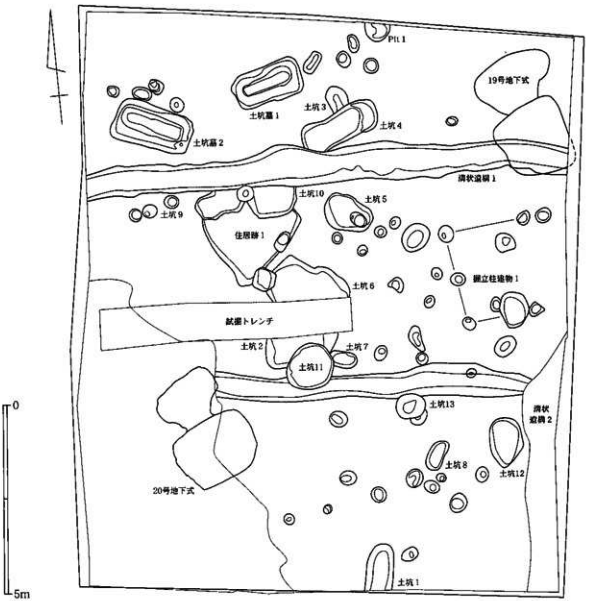
調査はⅠ区、Ⅱ区の二つの調査区を設定しておこなった。本調査地の基本層序は表土層から順に表土層→暗褐色土層→黒色土層→アカホヤ火山灰層→黒色ローム層→暗褐色ローム層である。黒色土が弥生時代から中世までの遺物包含層であり、各時代の生活面もこの層中に存在している。しかし、地山層と遺構覆土が同質同色土であり、分層、遺構検出が困難であった。そのため便宜上アカホヤ火山灰層上面において遺構検出をおこなっている。

Ⅰ区は、かなり大きく削平を受けた様子で、表土直下において暗褐色ローム層が検出される状況であった。削平範囲が広範囲で、深さも深いことなどから、比較的新しい時期の大規模な削平によるものではないかと考えられる。削平前においては、Ⅰ区部分は現況よりもさらに高まった小高い地形であったと考えられる。この削平の影響もあってか、Ⅰ区ではいくつかのピットが検出できたに過ぎなかった。これらのピットについては、遺物が出土しないものがほとんどで、出土している遺物についても小片ばかりであり、遺構の時期を積極的に比定できるものは残念ながら存在しなかった。



第4図　Ⅰ区平面図

Ⅱ区では、遺物包含層である黒色土以下が比較的良好に残存していた。包含層からは、古墳時代、古代を中心とし、一部弥生時代のものを含む土器、石器、鉄器などが多数出土した。検出された遺構は、古墳時代後期に位置づけられる下北方



第5図　Ⅱ区平面図

19 号地下式横穴墓、下北方 20 号地下式横穴墓、土器埋納ピット、古代に位置づけられる掘立柱建物１棟、道路状遺構の可能性もある溝状遺構２条、土坑、その他時期が不明ながらも住居跡１軒、土坑墓２基、土坑、ピットなどが検出された。また、これらに伴って多くの土師器、須恵器、凸面格子目タタキが施された古代瓦、金床石などの石器、鉄器、ガラス小玉などが出土した。

第２節　古墳時代の遺構と遺物

１．地下式横穴墓

下北方 19 号地下式横穴墓（第６図・７図）

遺構　Ⅱ区北東隅付近で検出された。竪坑は一部が溝状遺構１に切られていたが、削平の影響が少ないためにほぼ全形を知ることができる。検出した段階において、玄室に相当すると思われる部分で、アカホヤ層など地山が周辺に比してわずかに落ち込んでいる部分が認められ、玄室は幾

分崩落していることが予想された。

竪坑はほぼ正方形で、検出面での規模は南北 1.9m、東西 1.8mである。深さは検出面から 1.3mで褐色ローム層まで掘り込まれている。各壁についてみると、竪坑前壁は下方へ向かってほぼ垂直に落ちており、板状の閉塞材による閉塞を意識したつくりである可能性がある。そのほかの壁は下方へ向かってやや内傾しており、結果、竪坑の断面形態は逆台形になる。竪坑左右壁から後壁には、暗褐色の土が貼り付けられている。形態や傾斜はいびつではあるが、断面形態がゆるい階段状にも見えることから、竪坑への出入りのための簡易なステップであったと思われる。羨門の閉塞状況に関しては、閉塞の痕跡が見出すことができず詳細は不明である。ただし、閉塞材が遺存していないことから、板などの有機物による閉塞がなされていたことは間違いないだろう。竪坑内に古代の土師器片が混じる土層が堆積していることも、有機物の閉塞材腐朽の後に、地下式横穴墓構築時の竪坑埋土が玄室内に流入し、その結果、竪坑内に古墳時代以降の土が堆積したものと判断できる。

羨門は、一部が崩落していたが、現存部分から全体形を知ることができる。羨門の形態は、やや不整形なアーチ形で、幅が底面で 88cm、高さが推定で 86cm である。羨道部は緩やかに湾曲しながら玄室へ至っており、玄室と羨道との境界は曖昧になっている。右側は特にその傾向が著しい。

玄室は、平入りで、平面形態は奥行 1.5m、幅 2.0m の不整楕円形である。天井は多くの部分が崩落しており、構築時の形態を留めていなかった。しかし、残存する部分から、ドーム形の天井形態であったと判断できる。天井高は推定で 75cm である。玄室掘方は羨門側が一部だけわずかに深く掘り窪められていた。そのため、当該部分には、埋葬時の床面を平坦にすることを目的として、黒褐色土による貼床がなされていた。また、玄室内中央部付近には屍床が設けられていた。屍床は奥行 0.7m、幅 1.4mの大きさで、約 10～20cm ほどの扁平な円礫を敷くことによって作られている。屍床西端にのみ、厚みのある大振りの礫が3石配置されており、当該部分が頭位であったと判断できる。

出土遺物　地下式横穴墓にともなう遺物には、土師器、須恵器、鉄鏃、鉄鎌、刀子があり、屍床内やその周囲に配置されていた。土器はいずれも屍床外の頭位側を取り囲むように置かれていた。そのうち、小型丸底壷には、内部に赤色顔料が入れられており、裏返しにされた須恵器坏蓋の中に置かれていた。本地下式横穴墓では須恵器はこの 1 点のみであり、赤色顔料が入れられた小型丸底壷の受け皿として、須恵器が選択的に用いられていることが考えられる。鉄鏃は、2 本が屍床内羨門側に鏃身を頭位側に向けて礫の隙間に落ち込んだような状況で検出された。鉄鎌、刀子は屍床外奥壁側で検出され、鉄鎌は刃部を屍床側に向けて、刀子は鋒を屍床側に向けた状態で置かれていた。

1 は鉢である。全体的に厚ぼったく、重量感がある。外面は上半にはミガキ、下半には手持ヘラケズリが施されている。内面上半は丁寧にミガキがなされ、下半は指押えの後にナデ調整がなされている。2 は小型丸底壷である。粗雑に成形されており、いびつな印象を受ける。内外面ともに指押えの後、ミガキ調整がなされている。3 は壷である。肩部が大きく張る形状である。内外面ともに指押えの後にナデ調整がなされるが、調整が粗雑なために粘土紐の積み上げ痕跡が明瞭に観察できる。4 は須恵器坏蓋である。天井部の中ほどまでヘラ削りが施されている。天井部と受部の境界は曖昧になっている。5 ～ 9 は模倣坏である。5 は坏蓋である。内外面ともにミガキ調整がなされている。ヘラ記号が内外面に認められる。6 は坏蓋で、内外面ともにミガキ調整

がなされている。7 は坏身である。内外面ともにミガキ調整がなされている。ヘラ記号が内外面に認められる。このヘラ記号は蓋模倣坏である 5 と同じ形のもので、この両者がセットであった可能性が高い。8 は坏身である。内外面ともにミガキ調整がなされている。内面の一部には赤色顔料がわずかに付着している。9 は坏身である。内外面ともにミガキ調整がなされているが、風化が進んでおり不明瞭である。10 は圭頭鏃で、現存長 10.4cm、鏃身幅 2.9cm、身厚 0.2cm である。両丸造で、頸部の断面形は長方形である。頸部は緩やかに内湾しながら茎部へと至っている。矢柄部分は銹化が著しいが、樹皮による口巻が確認できる。11 は長三角形鏃で、現存長 10.8cm、鏃身幅 2.0cm、身厚 0.2cm である。両丸造で、頸部断面形は長方形である。矢柄部分は銹化が著しく詳細不明である。12 は刀子である。関周辺の銹化が著しく、関周辺の形態を知ることができない。現状で計測可能な部分において、身部幅 1.3cm、身部厚 0.3cm、茎部幅 1.0cm、茎部厚 0.3cm を測る。茎部分にわずかに有機質が残存しており、柄の一部と考えられる。13 は鉄鎌である。直刃鎌で、長さ 12.7cm、幅は最大で 3.5cm である。刃部先端は方形、着柄部分は端部が折り返されている。表面・裏面ともに平織りの布や、革かと思しき有機物が付着しており、副葬時には布などにくるまれていた可能性がある。

出土した土器の年代は、いずれも今塩屋・松永編年の 6 期～7 期、須恵器形式では MT85～TK43 形式期に位置づけられる。したがって、本遺構の構築年代は、これらの遺物の示す時期、すなわち 6 世紀後半と判断できる。また、遺物の年代的なばらつきがないことなどから追葬もおこなわれていないと判断される。

下北方 20 号地下式横穴墓（第 8 ～10 図）

遺構　Ⅱ区南西付近で検出された。玄室天井部、羨門、竪坑の一部が重機などによる攪乱で破壊されており、当該部分の形態を知ることができない。また、この攪乱などの影響もあってか、玄室天井部も一部崩落していた。

竪坑は、検出面での規模が南北推定 1.7m、東西 2.3mで、左右に長い。竪坑のコーナー部は玄室側では角が作り出されているが、竪坑後壁側は緩やかに湾曲しており、明瞭な角が作り出されていない。検出面から竪坑底面までの深さは 1.14m で、19 号地下式横穴墓同様に褐色ローム層まで掘り込まれている。竪坑前壁は底面に向かってほぼ垂直になっており、板状の閉塞材による閉塞を意識したものかも知れない。それ以外の各壁はいずれも緩やかにカーブしながら内傾しているが、底面はおおむね平坦に仕上げられている。羨門の閉塞はその痕跡を見出せず詳細不明である。しかし、19 号地下式横穴墓と同様、何らかの有機物によって閉塞がなされていたと考えられる。竪坑内には有機物による閉塞の腐朽後に流入した土層が堆積しており、古代の土師器片などが出土した。

羨門は上半部が削平されており、下半部のみが残存していた。やや不整形で、いびつな印象を受けるが、アーチ形の羨門であったであろうと考えられる。羨門底面での幅は 70 ㎝で、高さは削平の影響で知ることができない。竪坑と羨道部分の境界は角が作り出されており、明瞭であるが、羨道部が逆ハの字状に開きながら玄室前壁へとつながっていくため、羨道部と玄室の境界は不明瞭になっている。

玄室は平入りで、平面形態は奥行 1.2m、幅 1.75mの不整楕円形である。天井形態は大部分が削平ないし崩落していたが、残存する部分から低いドーム形であったと思われ、推定の天井高は約 0.5m である。玄室床面はおおむね平坦に掘られており、貼床は認められなかった。玄室には

礫で作られた屍床が設けられていた。用いられていた礫は2～10cm ほどのもので、奥行 0.8m、幅 1.6mの範囲に約 10cm の厚さに敷かれていた。19 号地下式横穴墓で見られたような枕状の石材は認められなかった。屍床の状況から頭位を判断するのは難しいが、屍床中央左寄りからガラス小玉が集中して検出されたことから、頭位は 19 号地下式横穴墓と同じく屍床左側であった可能性が高い。

出土遺物　地下式横穴墓にともなう遺物には、土師器、須恵器、刀子、ガラス小玉があり、出土位置の詳細が不明な土師器甕以外は玄室内から検出された。模倣坏、須恵器は屍床内羨門側に、いずれも口縁部を上に向けて置かれていた。刀子は、玄室左側奥壁寄りに、鋒を玄室右壁側に向けて検出された。副葬時には被葬者の体の上に置かれていた可能性がある。ガラス小玉は屍床左側から集中して検出された。多くがフルイ作業による検出のため、原位置を把握できていない。

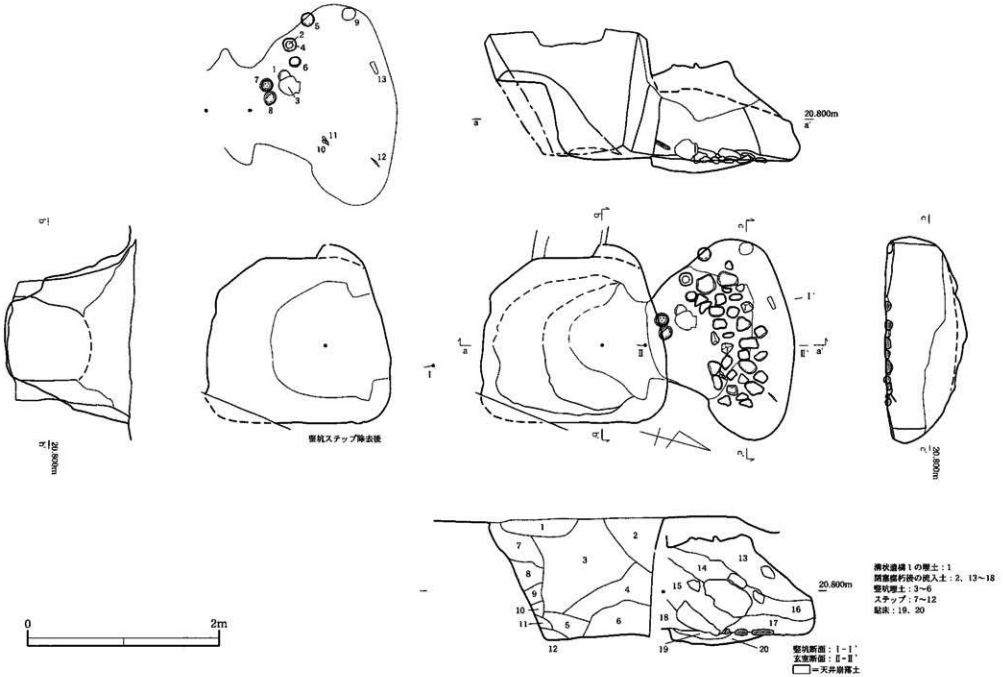
14 は須恵器坏蓋である。器高 3.9cm、口径 14.7cm である。外面に一条線のヘラ記号が認められる。15 は須恵器坏身である。器高 4.6cm、口径 11.9cm である。16 は蓋模倣の坏蓋である。内外面ともミガキ調整がなされており、外面には X 字状のヘラ記号が認められる。天井部と受部の境界が明瞭で精美なつくりである。17 は壺である。胴部最大径は胴下部が最大となり、22.2cm である。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収められている。外面にはハケ、ナデによる調整、手持ちヘラケズリが施されているが、おおよそ最大径の部分から上下でその様子が異なる。すなわち、上部では幅広で長い単位のハケ、ナデが施されているが、下部では、幅狭で短い単位の手持ヘラケズリが施されている。内面は指押えの後に不定方向へのナデが施されている。18 は刀子である。全体に銹化が著しい。現存長約 15.5cm、刃部幅は最大で約 1.4cm、刃部長は約 9.0cm である。柄が一部残存しており、そのために、肉眼観察では関部形状、茎部長などを知ることができない。22～159 はガラス小玉である。直径は 1.7mm～3.0mm で、色調はエメラルドグリーンである。実体顕微鏡による観察からは、これらガラス小玉は、管切り法により製作され、切断面は再加熱によって処理されたものと考えられる。

そのほか、羨門閉塞腐朽後の竪坑流入土から、以下の遺物が出土した。19 は鉢もしくは壺の底部である。底径は推定で 15.8cm である。外面は格子目タタキが施されており、一部に粘土継ぎ目の痕跡が認められるなど、つくりがやや粗雑な印象を受ける。内面は、ハケ目、ナデが見られる。20 は坏である。風化気味であるが内外面ともに回転ナデが施されている。底部と体部の境界はくびれをもち、その接合は、やや粗雑で、粘土のたまりが明瞭に観察できる。21 は坏である。内外面とも回転ナデが施されており、底部と体部の境界はなく、接合も丁寧である。底部外面に「生」字の墨書が認められる。

遺構にかかわる遺物は、今塩屋・松永編年の6期、須恵器形式では MT15～TK10 型式期に位置づけられる。したがって、本遺構の構築年代は、これら遺物が示す時期、すなわち 6 世紀前半であると判断できる。また、遺物の年代観にばらつきがないことなどから追葬もおこなわれていないと考えられる。

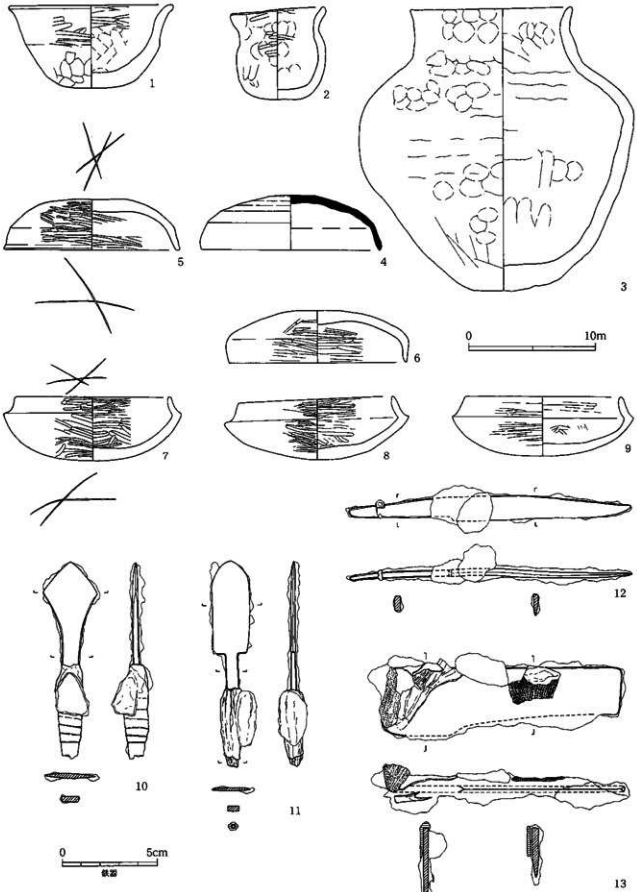
地下式横穴墓の構築位置

今回調査地では6世紀に位置付けられる2基の地下式横穴墓を検出した。下北方地下式横穴墓群において、これまで調査された地下式横穴墓は古墳周溝内、墳丘周辺に構築されるものばかりであった。その中にあって、今回調査した2基の地下式横穴墓は墳丘からかなり離れた位置に構築されている点は下北方地下式横穴墓群の群構造を考える上で注意される状況と言える。

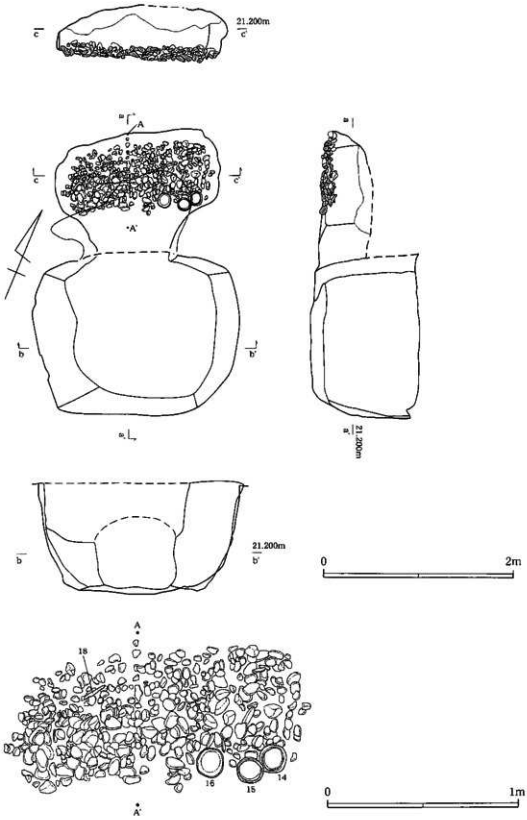


1:黒褐色土。締まり強い、粘性有。～3mmほどのアカホヤ粒を少量含む。
2:黒褐色土。締まり無、粘性有。アカホヤをごくわずか含む。
3:黒褐色土。締まり無、粘性有。～5mmのアカホヤ粒、～1cmの褐色ロームを含む。
4:黒褐色土。締まり無、粘性有。～1cmのアカホヤ粒を含む。
5:黒褐色土。締まり無、粘性有。アカホヤ粒をごくわずか含む。
6:黒褐色土。締まり無、粘性有。4層と同質だがアカホヤを含まない。
7:暗褐色土。締まり弱い、粘性有。黒褐色土、アカホヤ粒多く混じる。
8:暗褐色土。締まり弱い、粘性高い。地山の暗褐色ロームとほぼ同質土。
9:暗褐色土。締まり弱い、粘性高い。黒褐色土、アカホヤを含む。
10:暗褐色土。締まり弱い、粘性高い。アカホヤ粒、暗褐色ロームを多く含む。
11:暗褐色土。締まり弱い、粘性高い。アカホヤ粒、黒色ロームを含む。
12:黒褐色土。締まり無、粘性高い。暗褐色ロームを含む。
13:黒褐色土。締まり無、粘性有。アカホヤ粒を含む。
14:黒褐色土。締まり無、粘性有。アカホヤ、牛の脛ブロックをごくわずか、黒色ローム粒を含む。
15:黒褐色土。締まり無、粘性有。アカホヤ粒をごくわずか含む。
16:黒色土。締まり無くポロポロ崩れやすい、粘性有。黒色ロームブロックを含む。
17:黒色土。締まり無、粘性有。暗褐色ロームブロック、アカホヤ粒をわずか含む。
18:黒褐色土。やや締まる、粘性有。アカホヤ粒を含む。
19:黒褐色土。締まり無、粘性有。暗褐色ローム、アカホヤブロックを多く含む。
20:暗褐色土。締まり無、粘性有。下層の暗褐色ローム層とほぼ同質土、アカホヤ粒を含む。

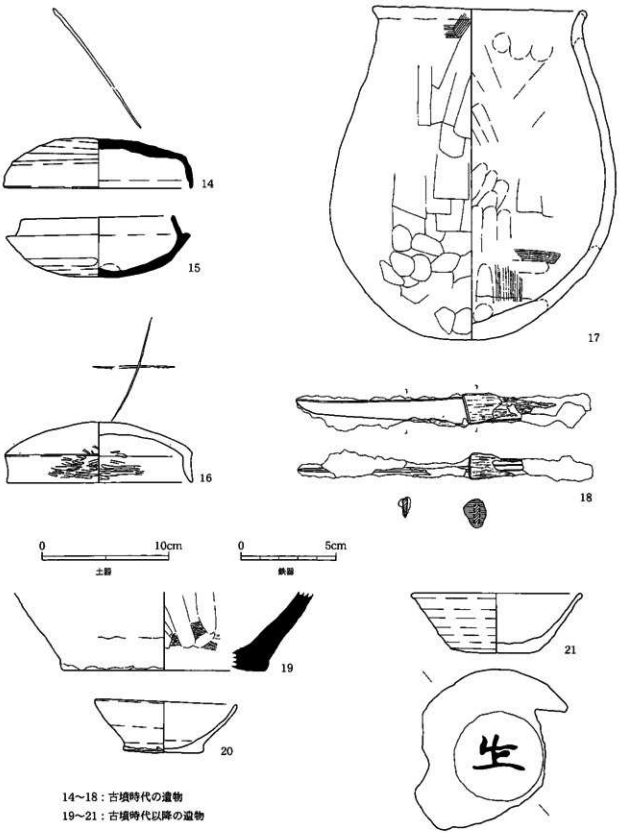
第6図　下北方 19 号地下式横穴墓



第7図　下北方 19 号地下式横穴墓出土遺物

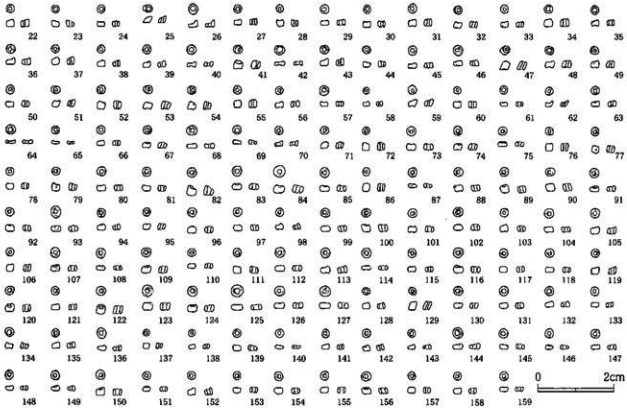


第8図　下北方2号地下式横穴墓



14～18：古墳時代の遺物
19～21：古墳時代以降の遺物

第9図　下北方 20 号地下式横穴墓出土遺物（1）



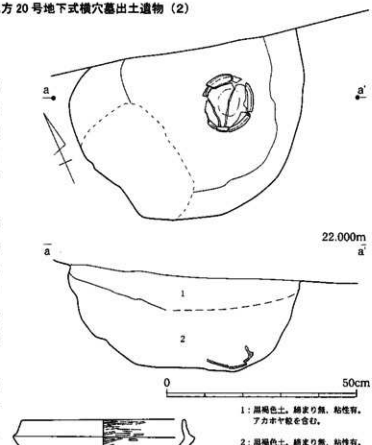
第 10 図　下北方 20 号地下式横穴墓出土遺物（2）

2．Pit

Pit1（第 11 図）

遺構　Ⅱ区北東、19 号地下式横穴墓北西側で検出された。ピットの直径は 64cm で、検出面からの深さは 27cm である。底面付近は一部攪乱されていた。平面形態は不整形な円形で、断面形態はＵ字形である。

遺物　ピット底面から模倣坏１個体が口縁部を上にして検出された。この検出状況からは、本遺構が模倣坏を埋納することを目的としてつくられたものと判断していいだろう。160 は模倣坏の坏身である。口縁部はわずかに内傾している。風化が著しいが、内外面ともにミガキが施されている。この模倣坏は今塩屋・松永編年 7 期に位置づけられるもので、ほぼ同時期に近接した位置に構築されている 19 号地下式横穴墓との関係が注目できる。



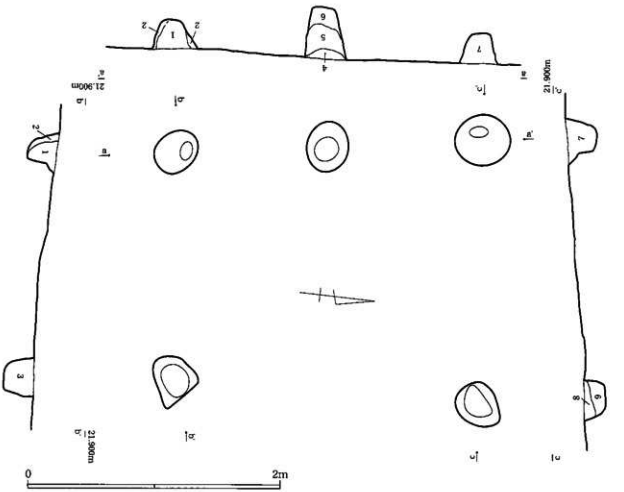
第 11 図　Pit1、Pit1 出土遺物

第3節　古代の遺構と遺物

1．掘立柱建物

掘立柱建物1（第12図）

遺構　Ⅱ区東側、二条の溝状遺構の間で検出された。建物の東側は調査区外に出ており、全体形を知ることはできない。調査区内において、梁行2間、桁行1間、計5つの柱穴が確認された。長軸は東西方向に向いている。柱間は梁行で約2.5m、桁行は南北で若干差があり、それぞれ1.8m、2.1mである。柱穴の規模は、直径約35cm、深さ約25cm程度である。土層断面を観察したが、各柱穴には明らかに柱痕跡と認められるものは確認できなかった。また、柱穴底面においても、柱を置いた痕跡など認められなかった。



1:黒褐色土。締まり無。粘性有。アカホヤ粒をごくわずか含む。
2:黒褐色土。締まり無。粘性有。アカホヤ粒を含む。
3:黒褐色土。やや締まる。粘性有。アカホヤ粒をごくわずか含む。
4:黒褐色土。締まり無。粘性有。アカホヤ粒をごくわずか含む。
5:黒褐色土。締まり無。粘性有。アカホヤブロック粒を多く含む。
6:黒褐色土。上層より締まる。粘性有。アカホヤ粒をごくわずか含む。
7:黒褐色土。締まり無。粘性有。アカホヤブロックを多く含む。
8:黒褐色土。締まり無。粘性有。アカホヤブロック粒を多く含む。
9:黒褐色土。締まり有。粘性有。アカホヤ粒を含む。

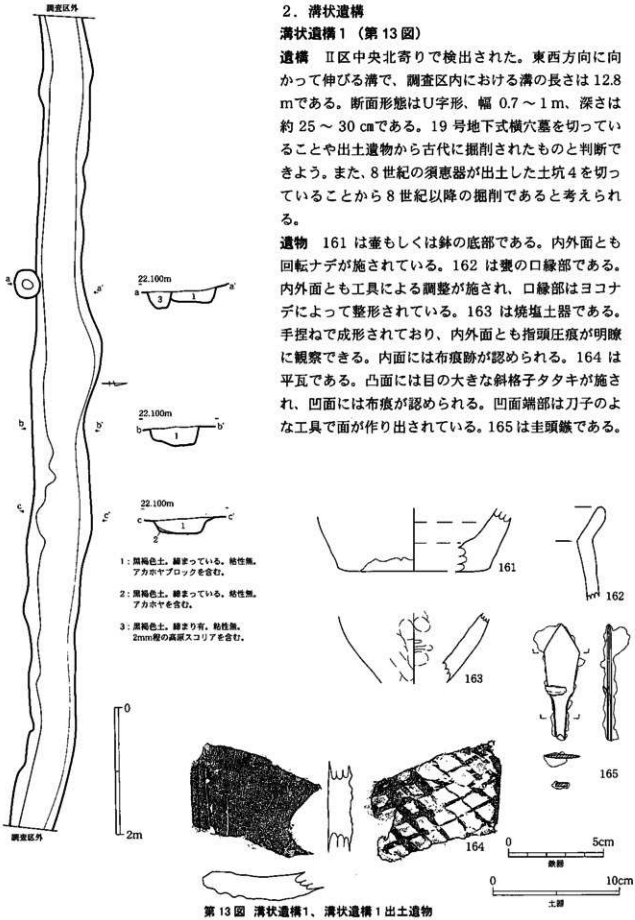
第12図　掘立柱建物

2．溝状遺構

溝状遺構１（第 13 図）

遺構　Ⅱ区中央北寄りで検出された。東西方向に向かって伸びる溝で、調査区内における溝の長さは 12.8 mである。断面形態はU字形、幅 0.7 ～ 1 m、深さは約 25 ～ 30 cmである。19 号地下式横穴墓を切っていることや出土遺物から古代に掘削されたものと判断できよう。また、8 世紀の須恵器が出土した土坑 4 を切っていることから 8 世紀以降の掘削であると考えられる。

遺物　161 は壷もしくは鉢の底部である。内外面とも回転ナデが施されている。162 は甕の口縁部である。内外面とも工具による調整が施され、口縁部はヨコナデによって整形されている。163 は焼塩土器である。手捏ねで成形されており、内外面とも指頭圧痕が明瞭に観察できる。内面には布痕跡が認められる。164 は平瓦である。凸面には目の大きな斜格子タタキが施され、凹面には布痕が認められる。凹面端部は刀子のような工具で面が作り出されている。165 は圭頭鏃である。



第 13 図　溝状遺構1、溝状遺構 1 出土遺物

現存長 6.1cm で、鏃身部は長さ 3.6cm、幅 1.9cm、厚さ 0.2cm の両丸造である。頸部は現存長 2.5cm、幅 0.6cm で断面形態は長方形である。鏃身部に有機質が付着している。

溝状遺構 2（第 14・15 図）

遺構　Ⅱ区中央部南寄りで検出された。溝の東西端部は撹乱により削平されている。東西方向に伸びる溝で、現状での長さは 7.9mである。断面形態はU字形、幅 60 ～ 80 ㎝、深さは約 20cm である。10 世紀～13 世紀の間に降灰した高原スコリアを覆土に含む土坑 11 に切られていること、出土遺物から古代に掘削されたものと判断できよう。

遺物　166 は坏底部である。ヘラ切底で、内外面ともに回転ナデが施されている。底部と体部の境界はわずかに段をもつ。167 は甕である。口径は 19.3cm で、外面はナデ調整、内面はケズリ調整がなされている。168 ～ 170 は平瓦である。いずれも凸面には斜格子タタキが施され、凹面には布痕跡が見られる。168、169 は端部が残存しており、工具によって整形され面が作り出されていることがわかる。171 は鉄鎌である。曲刃鎌で、刃部中央付近から先端部に向けて湾曲している。着柄部分は折り返し部分を上に向けて左側にあり、刃対して斜めに折り返されている。長さは 17.2cm、身幅は 1.8cm である。172 ～ 176 は鉄器生産関連遺物である。172 は敲石である。角のある石材で、角部分を中心として敲打痕が確認できる。石材は全体的に赤化しているが、使用時のものか判断できない。173 ～ 176 は金床石である。いずれも扁平な石材で、高温での作業による赤化、あるいは黒化が石材端部付近に認められる。173 以外は欠損しており、鉄製品の鍛打作業によって破損したものと考えられよう。

溝状遺構の性格　ここで、今回調査区で検出された 2 条の溝状遺構について見てみると、この 2 条はほぼ並行であること、検出面での幅や、深さが近い値であること、覆土の状況が似ていることなどに注目できる。これらのことから、この 2 条の溝状遺構は同時期に、同様の目的を持って掘削されたものであると考えるのが妥当であろう。溝間の距離は約 5mである。硬化面の存在など、積極的に道路状遺構の存在を証明するものは確認できなかったが、ほぼ平行に掘削されたこの 2 条の溝は、道路を区画することを目的として掘削されたものである可能性があることを指摘しておきたい。

3．土坑（第 16・17 図）

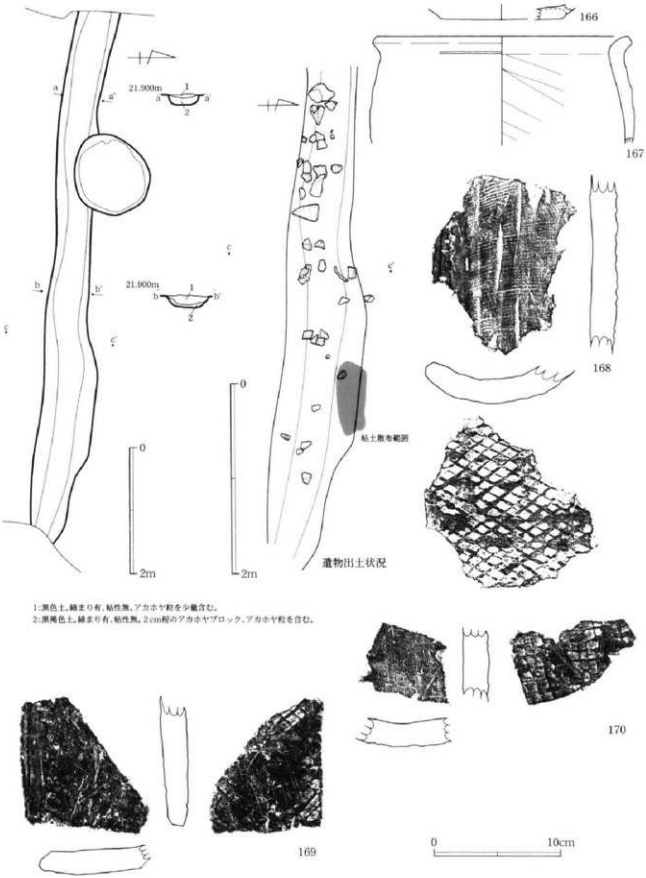
土坑 1

遺構　調査区南側で検出された。南半分が調査区外に出ているために全体形を知ることができないが、平面形態は楕円形であると思われる。断面形態はすり鉢状で、残存深が浅いこともあってか底面から斜面への傾斜変化が緩やかである。規模は、現状で、長さ 114cm、幅 73cm で、深さは 14cm である。

遺物　遺物は細片ばかりのため図示していないが、ヘラ切り底の坏底部片や、体部片など、古代に位置づけられるものが少量出土している。

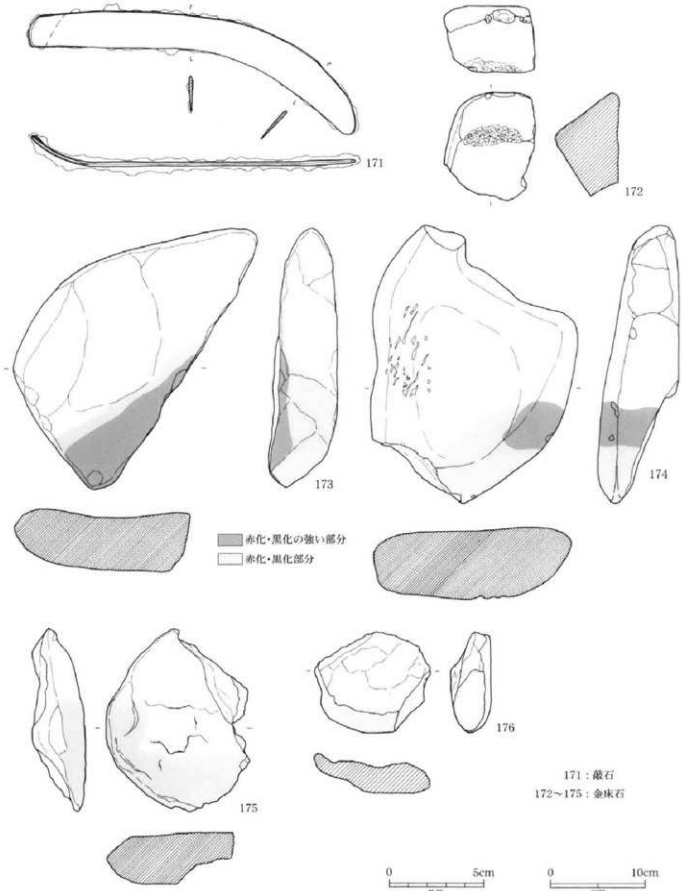
土坑 2

遺構　土坑 11 および試掘トレンチによって切られている。そのため、正確な平面形態を知ることはできないが、残存している部分から推測すれば略方形になると思われる。断面形態はすり鉢状で、底面と斜面の傾斜変化は緩やかである。規模は、長さ 190cm、幅現存 73cm、深さ 26cm



1:黒色土。締まり有。粘性無。アカホヤ粒を少量含む。
2:黒褐色土。締まり有。粘性無。2cm程のアカホヤブロック、アカホヤ粒を含む。

第 14 図　溝状遺構2、溝状遺構2出土遺物



第 15 図　溝状遺構2出土遺物

である。試掘トレンチ北側に本土坑が及んでいないことから、トレンチ内に収まる規模であったと考えられる。

遺物　細片のため図示していないが、古代に位置づけられる土師器片が出土している。

土坑3

遺構　大部分を土坑4によって切られている。現存で、長さ60cm、幅53cm、深さ8cmである。現存部分から推定すれば、平面形態は不整楕円形で、断面形態はすり鉢状の土坑であったと思われる。

遺物　細片のため図示していないが、古代の土師器片が出土している。

土坑4

遺構　南端部が溝状遺構に切られているが、平面形態が楕円形、断面形態がすり鉢状の土坑であったと考えられる。土坑東端部は緩やかな階段状になっている。規模は長さ推定214cm、幅78cmで、深さは29cmである。

遺物　本遺構からは須恵器長頸壺が割れた状態で出土した。破片は約70cmの範囲に散らばって出土した。このことと、頸部以上が失われていることと合わせて考えると、本土坑へ埋没する当初から割れた状態であったのではないかと思われる。177は底部片である。平底で、底部内面には指押さえ痕跡が顕著に認められる。178は坏である。体部は外側に向かって緩やかに立ち上がっている。底部と体部の境界は不明瞭で、接合痕跡は丁寧に消されている。179は須恵器長頸壺である。頸部より上は欠損している。肩部が強く張り出して角を成し、全体形としては算盤玉形である。上面・内面底部の一部に灰かぶりしており、自然釉も見られる。牛頸編年Ⅶ期に位置づけられよう。180は平瓦である。凸面は斜格子タタキが施され、凹面には布痕が認められる。端部は工具で面取りが施されている。そのほか、図示していないが、坏口縁部片、焼塩土器片、甑底部片と思われるものが出土している。

土坑5

遺構　平面形態が不整楕円形、断面形態がすり鉢状の土坑である。規模は、長さ130cm、幅95cmで、深さが8cmである。

遺物　細片のため図示していないが、ヘラ切り底の坏底部片、焼塩土器片など、古代に位置づけられる土器片を中心として、焼成粘土塊や時期不明の土器片が出土している。

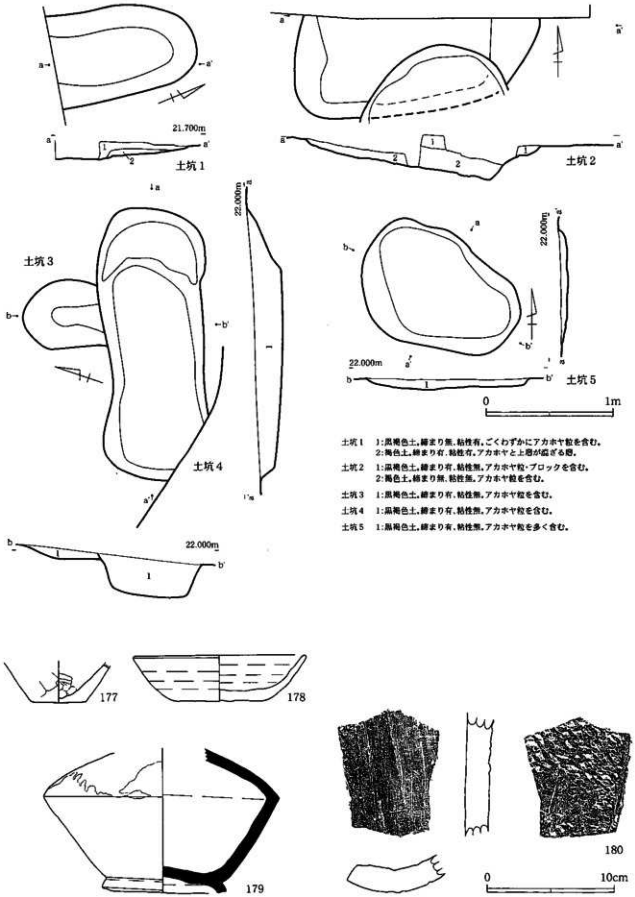
土坑6

遺構　ピットおよび試掘トレンチによって切られているため、平面形態を知ることができないが、現存部分から判断すれば、不整形の土坑であったと考えられる。断面形態はすり鉢状で、底面から斜面にかけての傾斜変化は緩やかである。規模は、長さ220cm、現存幅120cm、深さが14cmである。

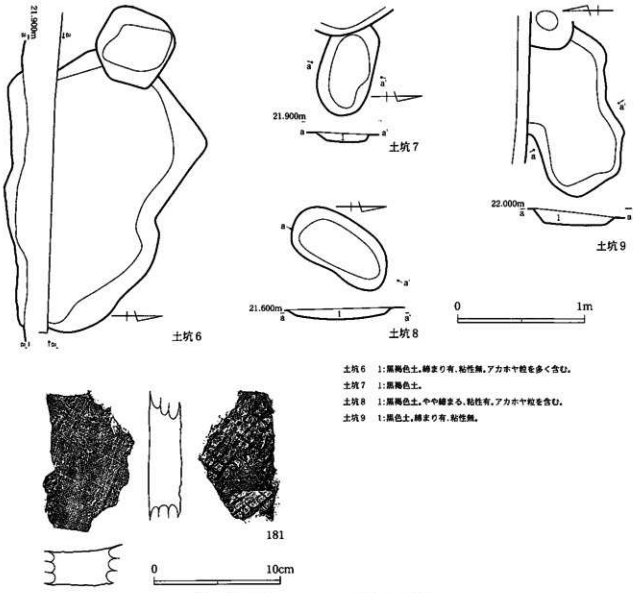
遺物　細片のため図示していないが、古代に位置づけられる土師器坏底部片が出土している。

土坑7

遺構　平面形態が楕円形、断面形態がすり鉢状の土坑である。土坑西端部が切られている。小規



第16図　土坑1・2・3・4・5、土坑4出土遺物



第17図　土坑6・7・8・9、土坑9出土遺物

模な土坑で、現存長76cm、幅42cm、深さが7cmである。

遺物　図示していないが、古代に位置づけられる、ヘラ切り底の坏底部片が出土している。

土坑8

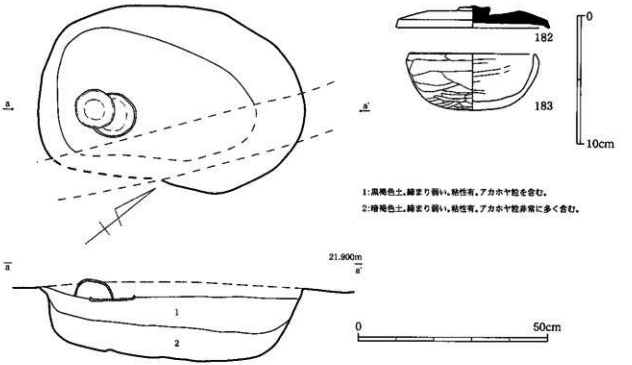
遺構　平面形態が楕円形、断面形態がすり鉢状の土坑である。長さ84cm、幅44cm、深さが9cmである。

遺物　細片のため図示していないが、古代の土師器片が出土している。

土坑9

遺構　遺構北側を溝状遺構1、ピットによって切られている。平面形態は不整形で、断面形態がすり鉢状の土坑である。現存長122cm、幅68cm、深さ10cmである。

遺物　181は平瓦である。全習を欠損しているが、凸面には格子目タタキが、凹面には布痕跡が認められる。



第 18 図 Pit2、Pit2出土遺物

4．Pit

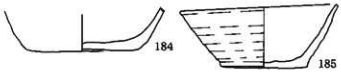
Pit2（第 18 図）

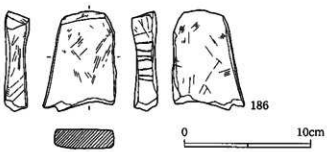
遺構　調査区中央付近で検出された。一部が攪乱により、破壊されているが、全体形は知ることができる。平面形態が不整楕円形、断面形態がＵ字形のピットである。長径 70cm、短径 45cm で、検出面からの深さは 20 ㎝である。

遺物　ピット底面から 12cm ほど浮いた位置で、完形の須恵器杯蓋と土師器椀が検出された。土器は須恵器坏蓋内面を上に向け、その上に土師器椀を伏せた状態であった。出土状況から、これら土器は意図的に埋納されたものと考えられる。伏せられた土師器椀内部からは何も検出されなかった。182 は須恵器坏蓋である。ボタン状のつまみが取り付けられている。天井部にはヘラケズリ、回転ナデが、内面には回転ナデの後に不定方向への仕上げナデが施されており、作りが非常に丁寧な印象を受ける。牛頸編年Ⅶ期に位置づけられる。183 は土師器椀である。外面は手持ヘラケズリ、内面はミガキが施される。口縁部は、手持ヘラケズリによって端部が整形されており、外見上、やや内傾した口縁部形態になっている。器形や調整など、造りが非常に丁寧で精美な印象を受ける。

5．Pit 内出土遺物（第 19 図）

そのほか、古代に位置づけられるいくつかのピットから遺物が出土している。184 は坏である。口縁部を欠損している。体部は、外側に向かって直線的に立ち上がっている。底部と体部の境界は不明瞭だが、わずかに段が認められる。底部外面は中心部がわずかに窪んでいる。185 は坏である。体部はわずかに内湾しながら外方に向かって立ち上がっている。口縁端部は丸く収められている。底部と体部の境界は丁寧に整形されており、わずかに窪んでいる。内外面とも回転ナデが施されている。186 は砥石である。扁平な石材で、一端を欠損している。岩質はきめ細かく、欠損部を除く全面に使用時





第 19 図　Pit 内出土遺物

の擦痕が認められる。図上、右側面には凹凸があり、棒状のものを研磨する作業がおこなわれたものと考えられる。

第４節　時期不明遺構

１．住居跡（第 20 図）

住居跡１

遺構　現存部分の形態から住居跡と判断した。現存最大で東西約 2.3m、南北 2.2m を測る。現存部分から判断すれば、やや不整形な方形の住居跡と考えられる。深さは 10～16 ㎝である。住居内には、柱穴は確認できなかった。直床で、現存する部分では炉やカマドなどの火処もなかった。

遺物　遺物は小片がわずかに出土したのみで、本遺構の時期を決めうるものは存在しなかった。本遺構は、古代の土坑に切られているため、それ以前の構築と判断できるがそれ以上時期を絞り込むことはできない。

２．土坑（第 20 図）

土坑 10

遺構　北側を溝状遺構１および Pit に切られており全体形を知れないが、現存部分から、平面形態は不整形な円形であると考えられる。断面形態はすり鉢状で、底面から壁面にかけての傾斜変換は緩やかであるが、やや北側のほうが壁面にかけての傾斜変換が急である点には注目できる。規模は東西 135 ㎝、南北現存 85 ㎝で、深さは 20 ㎝である。

遺物　小片が出土しているが、本遺構の時期を判断することはできない。本遺構は、古代の溝状遺構１に切られていることから、それ以前の構築であることは判断できる。

土坑 11

遺構　平面形態はほぼ円形で、断面形態がU字状の土坑である。底面から壁面にかけての傾斜変換が急で、壁が直線的に立ち上がる。規模は、東西 124 ㎝、南北 120 ㎝で、深さは 30 ㎝である。

遺物　本遺構からは遺物が出土しなかった。しかし、古代の溝状遺構２を切ること、10 世紀から 13 世紀の間に堆積した高原スコリアを覆土中に含むことから、古代から中世のいずれの時期かに構築されたものと考えられるが、詳しい時期を特定できない。

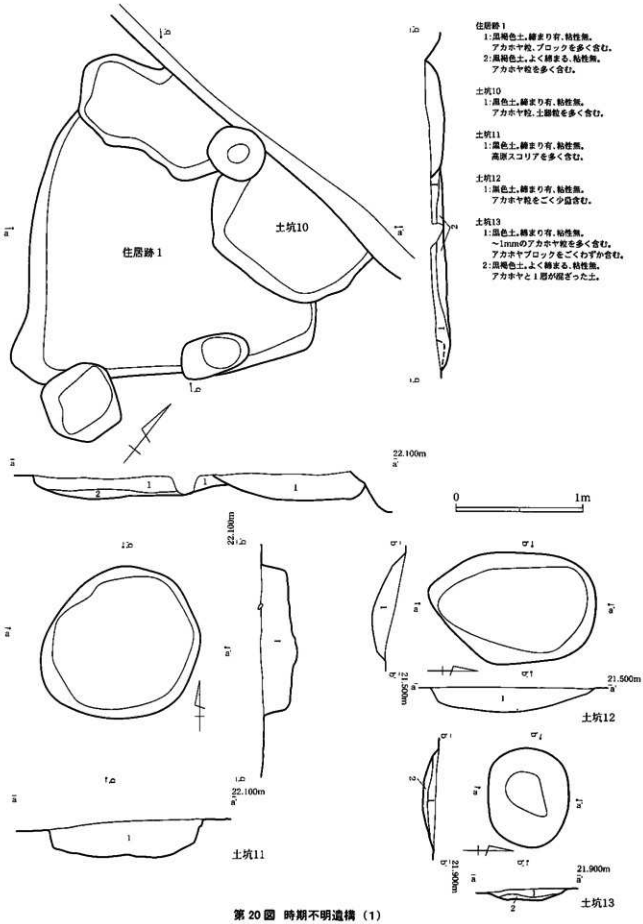
土坑 12

遺構　平面形態は南北方向に長い不整楕円形である。断面形態はすり鉢状である。規模は、長さ 133 ㎝、幅 86 ㎝で、深さは 20 ㎝である。

遺物　遺物は出土しなかった。

土坑 13

遺構　平面形態が東西方向にやや長い楕円形で、断面形態はすり鉢状の土坑である。規模は、長



住居跡1
1:黒褐色土、締まり有、粘性無。
アカホヤ粒、ブロックを多く含む。
2:黒褐色土、よく締まる、粘性無。
アカホヤ粒を多く含む。

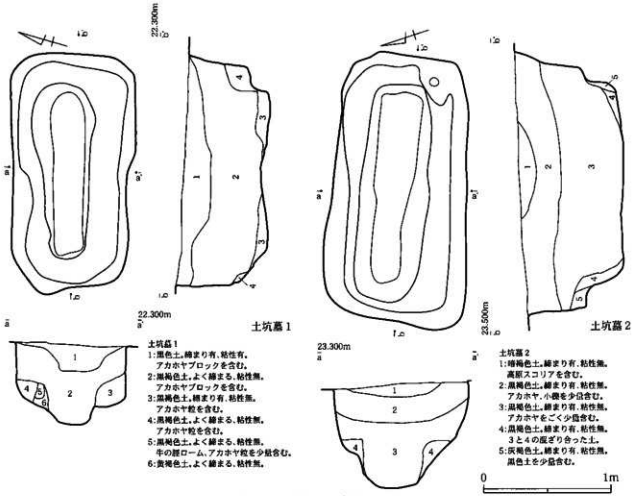
土坑10
1:黒色土、締まり有、粘性無。
アカホヤ粒、土器粒を多く含む。

土坑11
1:黒色土、締まり有、粘性無。
高原スコリアを多く含む。

土坑12
1:黒色土、締まり有、粘性無。
アカホヤ粒をごく少量含む。

土坑13
1:黒色土、締まり有、粘性無。
～1mmのアカホヤ粒を多く含む。
アカホヤブロックをごくわずか含む。
2:黒褐色土、よく締まる、粘性無。
アカホヤと1層が混ざった土。

第20図 時期不明遺構（1）



第 21 図　時期不明遺構（2）

さ 80 ㎝、幅 64 ㎝で、深さは 10 ㎝である。

遺物　遺物は出土しなかった。

3．土坑墓（第 21 図）

土坑墓 1

遺構　調査区北西側で検出された。平面形態は長方形で、中央部に棺材を設置するためのものと見られる段掘りがあり二段掘りになっている。主軸は東西方向で上段上端の長さが 183 ㎝、下段上端の長さが 137 ㎝である。幅は上下段とも東側が広く、それぞれ最大で 98 ㎝、50 ㎝である。このことから、本土坑墓の頭位は東側であったと判断できよう。堆積土を見ると、上段の平坦面上に棺材設置の際の裏込土が認められた。その上層には、棺材腐朽後の流入土が堆積している。

遺物　土器の小片がわずかに出土している。弥生時代もしくは古墳時代に位置づけられるものと思われるが、判然とせず、これをもって本遺構の時期を判断することは難しい。

土坑墓 2

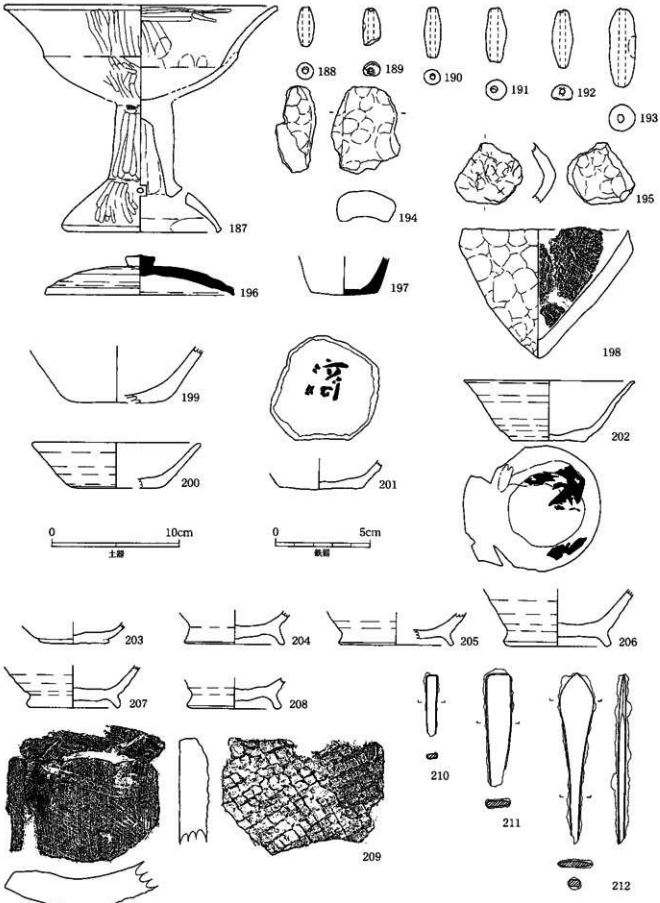
遺構　調査区北西側で検出された。平面形態は長方形で、中央部に棺材を設置するためのものと見られる段掘りがあり、二段掘りになっている。主軸は東西方向で、土坑墓 1 に比べてやや南側に向いている。長さは上段上端で 206 ㎝、下段上端で 170 ㎝である。幅は上段では、西側が広く 110 ㎝、下段では東西ともほぼ同じで約 50 ㎝である。ただし、下段下端をみると東側が幅広くなっており、頭位は東側であったと判断できる。土坑墓 1 と同様に、上段平坦面および下段壁際に棺材設置の際の裏込土が認められ、その上層には棺材腐朽後の流入土が堆積していた。

遺物　土器の小片がわずかに出土している。弥生時代もしくは古墳時代に位置づけられるものと思われるが、判然とせず、これをもって本遺構の時期を判断することは難しい。

第５節　遺構外出土遺物（第 22 図）

調査区内からは遺構に伴わない遺物も多く出土した。これらは、表土層出土遺物、包含層出土遺物、撹乱土層出土遺物に分けられる。

187 は高坏である。坏部と脚部は接合しなかったが、残存部位から全体形を推定復元した。エンタシス状の脚部をもち、透かし孔が４つ穿たれている。口縁部は短く、外反しながら立ち上がり、受部はやや深さのある形態である。口縁部と受部境界には稜線が見られる。また、受部と脚部の境界には、工具のあたり痕跡が認められる。今塩屋・松永編年の１期に位置づけられる。188 ～ 193 は土錘である。いずれも手捏ねで成形されており、おおむね大中小の３つに分類できる。孔内面を観察すると、直線的で凹凸が無く、棒状のものに粘土を巻きつけることで成形したものと推測できる。188 が小型、189 ～ 192 が中型、193 が大型にあたる。194 は甑の把手である。指頭圧痕が明瞭に観察される。195 は不明土製品である。厚さ約８～９㎜で、逆くの字状に屈折している。内外面ともに指頭圧痕が明瞭に残っており、手捏ねで成形されたことがわかる。196 は須恵器坏蓋である。返し部は端部を折り曲げたのみで、天井部にはボタン状のつまみが取り付けられている。牛頸編年Ⅶ期に位置づけられる。197 は須恵器小型壷である。底部のみの破片である。底部は扁平でなく、やや丸みを帯びており、佐土原町下村窯跡出土の小型壷と形態的に似た特徴を持つが、つくりがやや丁寧である。198 は焼塩土器である。逆円錐形で、内面には布圧痕が、外面には指頭圧痕が残っており、型成形により製作されたものと考えられる。199 ～ 203 は坏である。199 は底部から体部にかけての破片で、底部粘土円盤部と体部との接合部分が丁寧に整形されており、粘土のたまりや段差が無い。200 は、口縁部から底部にかけての破片である。ヘラ切り底で、199 同様底部粘土円盤部と体部との接合部分は丁寧に整形されている。201 は底部付近の破片である。ヘラ切り底で、底部粘土円盤と体部との接合部分は丁寧に整形されている。内面の見込み部分に墨書が認められる。風化が著しく、文字の正確な形は知ることができないが、残存している部分から、「崎」と書かれているのではないかと思われる。202 は全体形を知ることができる。ヘラ切り底で、底部粘土円盤と体部の接合部分は丁寧に整形されており、わずかに窪んでいる。また、底部外面中心部がわずかに凹んでおり、断面を見ると高台状を呈する。底部と体部の接合部分の窪み、高台状の底部は、高台付椀を意識したつくりであろうか。底部外面には墨が付着している。残存状態が悪く、墨書であるのかどうかの判断が付かない。203 は底部片である。底部粘土円盤と体部の接合部分は調整が粗雑で、両者の境界が明瞭に観察できる。204 ～ 208 は高台付椀の底部付近の破片である。204 は高台が外方に開き、端部は接地面に対しておよそ水平な面をなしている。205・206 は高台が外方に開き、端部は丸みを帯びている。207 は高台が外方に開き、端部がやや尖った形状のものである。208 は高台が外方に開き、端部付近にやや膨らみをもつものである。209 は平瓦である。凸面には格子目タタキが、内面には布痕跡が認められる。端部は、刀子のような工具で面取りがなされている。210・211 は棒状の鉄片である。210 は、現存長 3.3 ㎝、幅 0.6 ㎝である。形態から、特定の機能を考えにくく、鉄器製作の素材であると考えられる。211 は現存長 5.9 ㎝、幅 1.3 ㎝で、210 と同じく鉄素材であると思われる。212 は柳葉鏃である。無関で、鏃身から緩やかに湾曲しながら茎部へと至っている。両丸造、茎部の断面形は長方形で、鏃身幅は 1.8 ㎝、茎部幅は 0.5 ㎝である。



第 22 図　遺構外出土遺物

第1表 遺物観察表（1）

遺物No.	種別	器種	特徴	出土位置	器高(cm) (底径)	口径 (底径)	底径 (器高)	器形 内面	外面	備考	遺物No.	種別	器種	特徴	出土位置	器高(cm) (底径)	口径 (底径)	底径 (器高)	器形 内面	外面	備考
1	土師器	鉢	口縁一直線	砂母地下式	6.4	18.6	1.7	ナデ くぼみ	ヘラケズリ くぼみ	特記	100	土師器	甕又	—	土坑4	—	—	—	指手痕ナデ	指痕	～1mmの砂粒を多く含む
2	土師器	鉢	口縁一直線	砂母地下式	7.2	7.3	2.1	指押さえ くぼみ	指押さえ くぼみ	特記	101	土師器	甕又	—	土坑3	—	—	—	指手痕ナデ	指痕	～1mmの砂粒を多く含む
3	土師器	壺	口縁一直線	砂母地下式	22.1	12.6	8.8	指押さえ ナデ	指押さえ ナデ	3mmプロの砂粒を含む	102	須恵器	甕類	底部	Fig2	1.7	10.1	—	回転ナデ	ヘラケズリ ナデ	～1mmの砂粒をわずか含む
4	須恵器	杯蓋	口縁一直線	砂母地下式	4.3	14.1	—	回転ナデ	ヘラケズリ 回転ナデ	砂粒を少量含む	103	土師器	鉢	底部	Fig3	4.3	8.7	1.7	手痕ヘラケズリ	手痕ヘラケズリ	特記
5	土師器	杯蓋	口縁一直線	砂母地下式	3.9	13.8	—	くぼみ	くぼみ	砂粒を少量含む	104	土師器	杯	底部	表採Fig	—	—	8.3	回転ナデ	回転ナデ	～1mmの砂粒を含む
6	土師器	杯蓋	口縁一直線	砂母地下式	4.1	14.6	—	くぼみ	くぼみ	特記	105	土師器	杯	口縁～底部	表採Fig	5.9	13.1	6.1	回転ナデ	回転ナデ	～1mmの砂粒を含む
7	土師器	杯蓋	口縁一直線	砂母地下式	5.3	12.5	1.9	くぼみ	くぼみ	特記	107	土師器	高杯	口縁～底部	包含層	(17.0)	(21.2)	11.4	指押さえ くぼみ	くぼみ	～1mmの砂粒をわずか含む
8	土師器	杯蓋	口縁一直線	砂母地下式	4.2	13.1	2.2	くぼみ	くぼみ	特記	108	—	土師	高杯	包含層	3.0	1.3	1.3	指押さえ	指痕	砂粒を少量含む
9	土師器	杯蓋	口縁一直線	砂母地下式	4.7	12.4	1.8	くぼみ	くぼみ	砂粒をわずか含む	109	—	土師	—	包含層	—	1.4	1.6	指押さえ	指痕	砂粒を少量含む
10	須恵器	杯蓋	口縁一直線	砂母地下式	3.9	14.7	—	回転ナデ	ヘラケズリ 回転ナデ	特記	110	—	土師	高杯	包含層	3.9	1.3	1.1	指押さえ	特記	～1mmの砂粒を含む
11	須恵器	杯蓋	口縁一直線	砂母地下式	4.8	11.9	2.7	回転ナデ	ヘラケズリ	砂粒を含む	111	—	土師	高杯	包含層	4.3	1.6	1.6	指押さえ	特記	～1mmの砂粒を多く含む
12	土師器	杯蓋	口縁一直線	砂母地下式	4.8	14.5	1.8	くぼみ	くぼみ	砂粒を少量含む	112	—	土師	—	包含層	4.5	1.6	—	指押さえ	特記	～2mmの砂粒をわずか含む
13	土師器	鉢	口縁一直線	砂母地下式	25.9	16.6	2.1	指押さえ ナデ	手痕ヘラケズリ ナデ	砂粒を多く含む	113	—	土師	高杯	包含層	4.1	2.1	2.1	指押さえ	特記	特記
14	須恵器	鉢？	口縁一直線	砂母地下式	(13.6)	—	—	ナデ	ナデ	砂粒をわずか含む	114	土師器	鉢	底部	包含層	—	—	—	指押さえ	特記	～1mmの砂粒を多く含む
15	土師器	杯	口縁一直線	砂母地下式	(6.2)	(11.2)	6.2	回転ナデ	回転ナデ	特記	115	土師器	不明	脚部？	包含層	—	—	—	指押さえ・ナデ		～1mmの砂粒をごくわずか含む
16	土師器	杯	口縁一直線	砂母地下式	4.7	(13.1)	4.1	回転ナデ	回転ナデ	砂粒をわずか含む	116	須恵器	甕類	口縁～底部	包含層	3.1	(14.7)	—	回転ナデ ナデ	ヘラケズリ 回転ナデ	(mm以下の砂粒を多く含む)
17	土師器	鉢	口縁一直線	砂母地下式	4.1	12.9	1.1	くぼみ	くぼみ？	砂粒を含む	117	須恵器	甕	底部	表採Fig	—	—	(6.2)	回転ナデ	回転ナデ	特記
18	須恵器	壺？	底部	砂母地下式	—	—	(12.0)	回転ナデ ナデ？	ナデ	特記	118	土師器	須恵土器	口縁～底部	包含層	10.9	13.6	—	布目痕	指押さえ	砂粒をわずか含む
19	須恵器	壺	口縁一直線	砂母地下式	(6.2)	(11.2)	6.2	回転ナデ	回転ナデ	特記	119	土師器	杯	脚部～脚端	包含層	—	—	(6.3)	回転ナデ	回転ナデ	～1mmの砂粒を含む
20	土師器	杯	口縁一直線	砂母地下式	4.7	(13.1)	4.1	回転ナデ	回転ナデ	砂粒をわずか含む	120	須恵器	杯	脚部～口縁	包含層	3.1	(14.7)	—	回転ナデ 回転ナデ	ヘラケズリ 回転ナデ	(mm以下の砂粒を多く含む)
21	土師器	杯	口縁一直線	砂母地下式	4.1	12.9	1.1	くぼみ	くぼみ？	砂粒を含む	121	須恵器	甕	底部	表採Fig	—	—	(6.2)	回転ナデ	回転ナデ	特記
22	須恵器	壺？	底部	表採遺構1	—	—	(12.0)	回転ナデ ナデ？	ナデ	特記	122	土師器	須恵土器	口縁～底部	包含層	10.9	13.6	—	布目痕	指押さえ	砂粒をわずか含む
23	土師器	須恵土器	底部	表採遺構1	—	—	—	指押さえ	指押さえ	砂粒をわずか含む	123	土師器	杯	脚部～口縁	包含層	3.9	(13.1)	(7.5)	回転ナデ	回転ナデ	砂粒を少量含む
24	土師器	甲又	—	表採遺構1	—	—	—	指手痕ナデ	ケズリ？	～1mmの砂粒を含む	124	須恵器	杯	底部～脚部	包含層	—	—	6.5	回転ナデ	回転ナデ	～1mmの砂粒を少量含む
25	土師器	杯	口縁一直線	表採遺構1	—	—	(9.8)	回転ナデ	回転ナデ	特記	125	土師器	杯	口縁～底部	竪穴住	4.8	(13.2)	6.8	回転ナデ	回転ナデ	砂粒を砂粒をわずか含む
26	土師器	鉢	口縁一直線	表採遺構1	—	(18.3)	—	ナデ ケズリ	ケズリ ナデ	～1mmの砂粒を含む	126	土師器	杯	底部	包含層	—	—	5.4	回転ナデ	回転ナデ	特記
27	土師器	甲又	—	表採遺構1	—	—	—	指手痕ナデ	指痕	～1mmの砂粒を含む	127	土師器	鉢	底部	包含層	—	—	(7.7)	回転ナデ	回転ナデ	砂粒を砂粒を少量含む
28	土師器	甲又	—	表採遺構1	—	—	—	指手痕ナデ	指痕	～1mmの砂粒を含む	128	土師器	杯	底部～脚部	包含層	—	—	(6.4)	回転ナデ	回転ナデ	(mm以下の砂粒を少量含む)
29	土師器	甲又	—	表採遺構1	—	—	—	指手痕ナデ	指痕	～1mmの砂粒を含む	129	土師器	杯	底部～脚部	包含層	—	—	7.6	回転ナデ	回転ナデ	砂粒を砂粒を少量含む
30	土師器	壺？	底部	土坑4	—	—	3.4	指押さえ ナデ	ナデ	砂粒を多く含む	130	土師器	杯	底部～脚部	包含層	—	—	(7.4)	回転ナデ	回転ナデ	～1mmの砂粒をわずか含む
31	土師器	杯	口縁一直線	土坑4	3.6	(13.4)	—	回転ナデ	回転ナデ	特記	131	土師器	杯	底部～脚部	表土層	—	—	(6.4)	回転ナデ	回転ナデ	砂粒を砂粒を少量含む
32	須恵器	鉢	口縁一直線	土坑4	—	—	8.2	回転ナデ	回転ナデ	特記	132	土師器	甲又	—	包含層	—	—	—	指手痕ナデ	指痕	～1mmの砂粒を少量含む

第2表 遺物観察表（2）

遺物No.	種類	特徴	出土位置	剥片（cm） 長さ	幅	厚さ	遺物No.	種類	特徴	出土位置	砥石 長さ	幅	厚さ
10	鉄鏃	鏃身～茎	砂母地下式	10.3	3.0	0.2	165	鉄鏃	鏃身～茎	竪穴住構1	6.1	1.9	0.2
11	鉄鏃	鏃身～茎	砂母地下式	10.9	2.5	0.2	171	鉄鏃	完形	竪穴住構1	17.2	1.8	0.2
12	刀子	完形	砂母地下式	15.0	1.2	0.3	210	鉄片	—	土坑2	3.3	0.6	0.2
13	鉄鏃	完形	砂母地下式	12.7	3.5	(0.3)	211	鉄片	—	包含層	5.9	1.3	0.3
14	刀子	完形	砂母地下式	15.0	1.7	1.2	212	鉄鏃	鏃身～茎	包含層	5.0	1.8	0.3

第3表 遺物観察表（3）

遺物No.	種類	石材	出土位置	砥石 長さ	幅	厚さ	遺物No.	種類	石材	出土位置	砥石 長さ	幅	厚さ
172	砥石	砂岩	竪穴住構1	11.2	5.6	6.6	175	金床石	砂岩	竪穴住構2	19.1	5.4	5.6
173	金床石	砂岩	竪穴住構2	27.0	26.0	6.5	176	金床石	砂岩	竪穴住構2	10.5	4.2	4.2
174	金床石	砂岩	竪穴住構2	29.1	21.9	7.7	186	砥石	砂岩	表採Fig	7.7	5.7	1.9

第4表　遺物観察表（4）

図版No.	番号	材質	色調	出土位置	形状(cm) 最大径	最大厚	孔径	備考
22	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	2.0	1.9	
23	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.0	
24	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.3	1.0	
25	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.0	
26	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.7	1.3	
27	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.2	1.0	
28	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	1.9	1.5	0.8	
29	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.2	1.4	
30	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.6	1.3	不純物あり
31	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.7	1.0	不純物あり
32	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.6	0.9	
33	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.5	0.5	不純物あり
34	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	2.0	1.0	不純物あり
35	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.5	0.7	不純物あり
36	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.7	0.8	不純物あり
37	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	2.0	0.5	不純物あり
38	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.9	0.5	
39	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.5	0.5	不純物あり
40	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.4	0.6	
41	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	2.0	0.5	
42	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.7	1.4	1.5	不純物あり
43	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.9	0.5	不純物あり
44	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.9	1.4	0.6	不純物あり
45	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.3	1.0	
46	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.3	0.6	不純物あり
47	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	1.8	2.6	0.5	
48	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.4	1.7	0.7	
49	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.8	0.5	不純物あり
50	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.5	0.5	不純物あり
51	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	1.7	2.0	0.5	
52	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	2.0	0.4	不純物あり
53	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.7	0.5	
54	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	2.0	0.5	不純物あり
55	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	2.0	0.9	
56	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.5	0.7	
57	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.2	0.7	不純物あり
58	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	1.8	1.3	0.5	不純物あり
59	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.6	0.9	
60	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.5	0.4	不純物あり
61	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.0	0.9	
62	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.8	0.8	
63	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.4	0.7	
64	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.3	0.7	
65	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.7	1.0	不純物あり
66	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.9	0.7	1.0	
67	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.4	0.8	
68	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.7	1.1	1.0	不純物あり
69	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.0	1.0	
70	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.4	0.6	
71	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	2.0	0.7	
72	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	1.9	1.9	0.7	
73	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.0	
74	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.4	1.5	0.9	不純物あり
75	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.1	0.9	
76	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	2.0	0.7	不純物あり
77	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.9	1.0	不純物あり
78	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.5	0.8	
79	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	2.0	0.8	不純物あり
80	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.4	1.5	1.0	
81	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.5	1.0	
82	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	2.5	1.1	
83	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.9	0.9	
84	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	3.0	2.9	1.0	不純物あり
85	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	0.9	
86	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	2.0	0.7	
87	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	0.8	不純物あり
88	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.9	0.9	
89	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.0	
90	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.9	1.0	

図版No.	番号	材質	色調	出土位置	形状(cm) 最大径	最大厚	孔径	備考
91	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.3	1.0	
92	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.6	0.9	
93	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	3.0	3.0	1.0	
94	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.5	1.0	不純物あり
95	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.5	0.8	不純物あり
96	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.4	1.8	1.0	
97	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.5	1.0	
98	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.5	0.9	不純物あり
99	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.0	
100	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	2.0	1.0	
101	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.1	
102	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.0	不純物あり
103	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	2.0	0.9	不純物あり
104	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.0	
105	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.4	1.9	1.0	
106	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	2.0	0.9	
107	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	0.9	不純物あり
108	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.4	1.1	1.0	不純物あり
109	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.6	1.9	1.0	不純物あり
110	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.2	0.8	
111	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.9	1.0	不純物あり
112	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.0	
113	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	2.0	1.0	不純物あり
114	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.0	0.8	
115	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	1.5	1.0	
116	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	2.0	1.1	
117	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.5	0.9	
118	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.5	0.9	不純物あり
119	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.4	2.0	0.9	不純物あり
120	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	2.0	1.1	
121	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.0	
122	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	3.9	2.0	1.2	不純物あり
123	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.9	1.1	不純物あり
124	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	3.0	1.5	1.0	不純物あり
125	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.6	1.5	0.9	
126	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.7	1.5	0.9	不純物あり
127	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.5	1.3	
128	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.1	2.2	0.9	
129	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.4	1.1	不純物あり
130	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.2	
131	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.5	1.1	
132	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.1	1.0	不純物あり
133	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.5	1.4	不純物あり
134	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.5	0.9	不純物あり
135	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.7	1.2	0.9	不純物あり
136	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	1.7	1.4	0.7	
137	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	1.8	1.1	0.7	
138	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.5	1.0	不純物あり
139	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.0	1.0	不純物あり
140	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.4	0.9	不純物あり
141	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	2.0	1.0	不純物あり
142	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.3	1.0	
143	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.7	1.4	1.5	不純物あり
144	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.4	1.3	1.0	不純物あり
145	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.1	0.8	不純物あり
146	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.4	1.4	1.1	不純物あり
147	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.2	0.9	不純物あり
148	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.4	1.0	
149	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.2	0.9	
150	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.4	2.0	1.0	不純物あり
151	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.0	1.2	0.9	
152	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.9	1.8	1.0	
153	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.9	1.4	0.9	不純物あり
154	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.3	1.5	0.9	
155	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.5	0.9	
156	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.5	1.5	1.2	
157	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.6	1.5	1.0	不純物あり
158	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.6	1.5	0.9	
159	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.0	1.1	
160	小玉	ガラス	エメラルドグリーン	20号地下式	2.2	1.0	1.1	

第Ⅳ章　まとめ

第１節　下北方地下式横穴墓群における地下式横穴墓受容形態

下北方地下式横穴墓群は、宮崎平野部の宮崎市下北方町に所在する地下式横穴墓群である。宮崎平野部においては、５世紀後半から本格的に地下式横穴墓が受容され始める。これまで、当該地域の地下式横穴墓の中で注目されてきたのは、西都原４号地下式横穴墓や、下北方５号地下式横穴墓といった首長墓としての側面を持つ地下式横穴墓の存在で、その周辺に展開する小規模な地下式横穴墓や、それらを含めた地下式横穴墓群の群構造についてはこれまであまり検討がなされてこなかった言える。しかしながら、これらの検討をおこなうことは、宮崎平野部における地下式横穴墓の受容のあり方を知る上で不可欠な作業であると考えられる。

下北方地下式横穴墓群は５世紀後半から地下式横穴墓の構築が始まる地下式横穴墓群で、宮崎平野部における地下式横穴墓受容開始期から始まる地下式横穴墓群であると言える。また、今回の調査を含めて 21 基の地下式横穴墓が調査されており、上述の検討をおこなうに十分な資料の蓄積がある。そこで、本節では、これまでの調査成果から下北方地下式横穴墓群のあり方について検討し、その受容のあり方について考えてみたい。

下北方地下式横穴墓群で、これまでに知られている地下式横穴墓の位置を示したものが第 23 図で、第５表がその一覧表である。地下式横穴墓には様々な要素があるが、そのうち、玄室形態・規模、そして地下式横穴墓の構築された位置に注目し、その様相を５世紀後半と６世紀代という大きく２つの時期に区分して概観したい。

下北方地下式横穴墓群の構築開始期である５世紀後半には TK208 型式期に位置づけられる５号・10 号・16 号地下式横穴墓と、TK47 型式段階に位置づけられる４号・17 号地下式横穴墓がある。玄室形態・規模についてみると、５号・16 号・４号地下式横穴墓は妻入りで、玄室規模はいずれも奥行３ｍを超える群内では大型の一群である。特に ５ 号地下式横穴墓は奥行きが 5.3ｍときわめて規模が大きい。10 号・17 号地下式横穴墓は平入りで、いずれも奥行 1.5m、幅 2.5ｍ未満の小型のものである。また、これらの構築位置を見ると、妻入りで大型の ５ 号・16 号・４号地下式横穴墓は周溝内、墳丘側に向かって構築されており、平入りで小型の 10 号・17 号地下式横穴墓は周溝外に構築されている点に注目される。

６ 世紀になると、MT15 ～ TK10 型式期に位置づけられる 18 号・20 号地下式横穴墓と、MT85 ～ TK43 型式期に位置づけられる 12 号・19 号地下式横穴墓がある。玄室形態・規模をみると、いずれも平入りで、奥行 1.5m、幅 2.5m未満の小型のものである。また、構築位置についてみると、周溝内の墳丘外に向かって構築されている 12 号地下式横穴墓を除くと、すべて周溝外に構築されていることがわかる。

以上から、下北方の地下式横穴墓群のあり方は、その規模、玄室構造について明確に分類できることがわかる。結論から言えば、下北方地下式横穴墓群では、地下式横穴墓の受容開始期から明確な階層性をもって地下式横穴墓が受容されているということができるのである。

下北方地下式横穴墓群の地下式横穴墓は、５号地下式横穴墓に代表される「大型で妻入りの玄室を持ち他に比して豊富な副葬品を持つ一群」と、今回調査した 19 号・20 号地下式横穴墓のような「小型で平入りの玄室を持ち、副葬品が少ない一群」に分類できる。また、この両者は受容開始期の５世紀後半から並存しており、この両者が地下式横穴墓被葬者の階層差を表しているものと判断してよいだろう。地下式横穴墓の構築位置についてみても、周溝内に構築され、墳丘側

第 23 図　下北方地下式横穴墓群分布図（S＝1：4000、○が地下式横穴墓の位置）

第 5 表　下北方地下式横穴墓群一覧

号数	位置	時期	構造				遺物	備考
			墓坑	閉塞	玄室（規模/高さ：m）			
					平面	天井		
1								詳細不明
2								詳細不明
3								詳細不明
4	9号墳 周内	TK47？	方形	粘土	妻長 (3.5×1.8)	家 (1.4)	土師器・須恵器・鉄鏃・U字鋤先・鉄鎌・鉄刀・刀子・ヤリガンナ・鳥見ヤ・ガラス小玉・ガラス勾玉	
5	9号墳 周内	TK208	長方形	礫	妻長 (5.3×2.6)	家 (1.7)	小札鉄冠頭付胄・三角板鉄冠短甲・横矧板鉄冠短甲・鋲甲・金銅垂飾付耳飾・玉類・小型鏡・鉄鏃・鉄刀・鉄鎌・鉄鏃・馬具・農工具	
6	7号墳 周外	？	？	？	妻長 (2.4×1.4)	？	須恵器・土師器・耳環・鉄鏃・鉄刀	円礫による屍床
7	8号墳 周内	？	？	？	？	？	？	墓坑のみ調査
8	8号墳 周外	？	？	？	平？ (1.2×2.0)	？ (0.7)	須恵器・鉄鏃・刀子	
9	7号墳 周内	？	？	？	？	？	？	墓坑のみ調査
10	12号墳 近畿地	TK208	長方形	？	平長 (1.0×2.4)	ドーム？ (？)	須恵器・土師器・鉄刀・鉄鏃	
11	5号墳 周外	？	不整形	？	平不 (0.4×0.7)	ドーム (0.3)	なし	
12	3号墳 周外	MT85	不整方形	？	平不 (0.6×2.0)	ドーム (0.6)	須恵器	
13	3号墳 周外	？	長方形	板？	平不 (0.3×1.4)	ドーム (0.4)	なし	
14	3号墳 周外	？	長方形	？	平不 (0.9×2.2)	ドーム (？)	なし	
15	3・5号墳 近畿地	？	方形	板？	平不 (0.8×1.0)	ドーム (？)	土師器・鉄鏃	
16	1号墳 周内	TK208	方形	板	妻不 (3.0×2.1)	ドーム (0.8？)	土師器・鉄剣・滑石製白玉	
17	1号墳 近畿地	TK47	方形	？	平不 (1.2×2.2)	ドーム (0.7)	土師器・須恵器・刀子	
18	1号墳 近畿地	TK10	長方形	板	平不 (1.0×2.5)	ドーム (？)	須恵器	
19	単独	TK43～209	方形	？	平不 (1.5×2.0)	ドーム (0.7)	須恵器・土師器・鉄鏃・鉄鎌・刀子	円礫による屍床
20	単独	TK10	長方形	？	平不 (1.2×1.7)	ドーム (0.5)	須恵器・土師器・刀子・ガラス玉	円礫による屍床
21	1号墳 周外	？	？	？	？	？	？	墓坑のみ調査

「位置」：周内＝周溝内で玄室が墳丘向き、周外＝周溝内で玄室が墳丘外向き、近畿＝墳丘近くの周溝外、単独＝墳丘に隣接せず単独で立地することを示す。
「玄室」：妻長＝妻入長方形、妻不＝妻入不整形、平長＝平入り長方形、平不＝平入不整形であり、？は不明であることを示す。

に向かって構築されるものは大型妻入りの一群に限られている点も、上述の階層差が反映されているものと見られる。こうした階層性の出現こそが、下北方地下式横穴墓の特徴であり、地下式横穴墓成立の地である宮崎内陸部との対比の中で、当地における地下式横穴墓の受容のあり方を考える上で重要な要素であろう。他の地下式横穴墓群では詳細な群構造が不明だが、下北方地下式横穴墓群で見られたこの特徴は宮崎平野部の特徴であるといえるのではないだろうか。

4 世紀末に宮崎県内陸部において成立した地下式横穴墓は、群構造において明確な階層差は見出されず、集団墓としての性格をもっていたことが指摘されている（藤井大祐 2008 p.201）。これら地域については、地下式横穴墓成立当初からその終焉に至るまで明確な階層性は見出されない。この内陸部と平野部における群構造の違いが生み出された要因を考える際には、地下式横穴墓の群構造において階層性が見出される宮崎平野部は前方後円墳築造地域であり、階層性の見出されない内陸部は前方後円墳非築造地域であるという差に注目したい。つまり、内陸部において集団墓としての性格を帯びて成立した地下式横穴墓が、墳丘規模、埋葬施設などの内容によって相対的な階層性を表出した、前方後円墳築造地域である古墳時代社会に接触したことが、明確な階層性をもって地下式横穴墓が受容されたことの背景であると見てよいだろう。その際に首長の地下式横穴墓として生み出されたのが、大型で妻入りの玄室構造を持つ地下式横穴墓であると言える。

6 世紀代になると、下北方地下式横穴墓群では小型平入りの地下式横穴墓のみになる。しかし、地下式横穴墓のあり方も、19 号・20 号地下式横穴墓のように墳丘と離れた位置に構築されるものが見られるようになることには注目してよい。当該時期の首長墓についてはよくわかっておらず、それらと地下式横穴墓の関係については現段階で知ることができない。

本節では、現段階で内容をある程度知ることができる地下式横穴墓について検討し、下北方地下式横穴墓群のあり方について考えた。しかしながら、これら地下式横穴墓群自身の詳細や前方後円墳を含む高塚墳との関係、さらには、古墳時代社会の中での地下式横穴墓という墓制を考える上で検討されるべき課題は山積している。本節をもって、今後のこうした検討の足がかりとしたい。

第 2 節　溝状遺構出土の鉄器製作関連遺物について

今回の調査では、古代に掘削されたと見られるⅡ区溝状遺構などから、鉄器製作に関連する遺物が検出された。これらは、金床石、敲石や鉄素材と思しき鉄片である。これら古代における鉄器製作関連遺物は下北方台地においてこれまで確認されておらず、古代下北方台地の景観を考える上で重要な遺物であると言える。本節では、これらの遺物の特徴や出土状況などから、古代下北方台地の鉄器製作の可能性について考えてみたい。

金床石は、いずれも扁平な石材で石材の端部付近に被熱により赤化、黒化した部分が顕著に認められ、部分的に鉄銹が付着しているものもあり、石材端部付近で鉄器の鍛打作業がおこなわれた様子が看取できる。鍛打作業部付近が破損しており、使用に耐えなくなったものと考えられるものがある。敲石は石材の角付近に微細な剥離が集中して認められる。鉄片は不整形で棒状のもので、形状から何らかの機能を有する製品とは考えがたく、鉄器製作のための鉄素材であると考えられる。

これら鉄器製作関連遺物の多くは、Ⅱ区溝状遺構から検出された。出土状況についてみると、溝の一角に集中して廃棄されたような状況であった。金床石などの多くは割れて破損した状況で

あることからも、これら遺物が廃棄されたものであることがうかがえる。また、一角に集中して見られる状況からは、数次にわたる廃棄ではなく、一時の廃棄によるものであることを想起させる。

このような鉄器生産関連遺物、特に金床石などのような大型で重量のあるものは、廃棄にあたって、わざわざ遠隔地に運ぶということは考えがたい。加えて、素材の可能性がある鉄片が出土していることから考えると、周辺に鉄器製作跡が存在している可能性はかなり高いものと判断できよう。さらに、今回調査地から、焼成粘土塊が一定量出土したことをあわせて考えれば、土器製作跡も周辺に展開していた可能性が考えられ、古代下北方台地上には複合的な生活用具の生産跡が展開していたことも想定できる。

【参考文献】

石川恒太郎　1972「宮崎市下北方町地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告』第16集　宮崎県教育委員会

今塩屋毅行・松永幸寿　2002「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心にして－」『第5回九州前方後円墳研究会　古墳時代中後期の土師器－その編年と地域性－』発表要旨　九州前方後円墳研究会

金丸武司編　2008『下北方5号墳周辺遺跡』宮崎市文化財調査報告書第68集　宮崎市教育委員会

竹中克繁編　2008『下北方1号墳周辺遺跡』宮崎市文化財調査報告書第71集　宮崎市教育委員会

野間重孝編　1977『下北方第5号地下式横穴墓』宮崎市文化財調査報告書第3集　宮崎市教育委員会

野間重孝　1993「下北方古墳群」『宮崎県史　資料編考古2』宮崎県

橋本達也　2008「第2章　古墳時代墓制としての地下式横穴墓」『大隅串良　岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告№3　pp.205-214

東憲章　2001「地下式横穴墓の成立と展開」『第4回九州前方後円墳研究会　九州の横穴墓と地下式横穴墓』発表要旨　九州前方後円墳研究会　pp.497-504

藤井大祐　2007「九州南部の中期古墳」『第10回九州前方後円墳研究会　九州島における中期古墳の再検討』発表要旨　九州前方後円墳研究会　pp.139-159

藤井大祐　2008「第1章　岡崎18号墳地下式横穴墓群の意義」『大隅串良　岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告№3　pp.191-204

舟山良一・石川健編　2008『牛頸窯跡群　総括報告書Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第77集　大野城市教育委員会

北郷泰道　2006「再論・南境の民の墓制」『宮崎県西都原考古博物館　研究紀要』第2号　宮崎県立西都原考古博物館　pp.1-12

宮崎県教育委員会編　2008『宮崎県指定古墳等再編活用事業報告書Ⅰ』宮崎県教育委員会

和田理啓　2001「日向の地下式横穴」『第4回九州前方後円墳研究会　九州の横穴墓と地下式横穴墓』発表要旨　九州前方後円墳研究会　pp.607-621

和田理啓　2008『楠牟礼1号地下式横穴墓』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告第180集　宮崎県埋蔵文化財センター

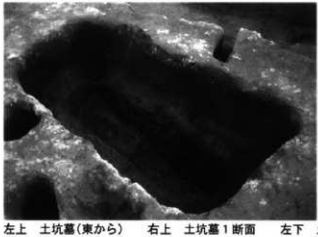
写 真 図 版

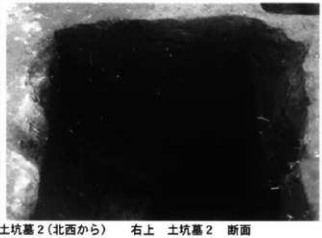
図版1

Ⅰ区全景(南東から)

Ⅰ区Pit群完掘状況(南東から)

II 区全景（北西から）

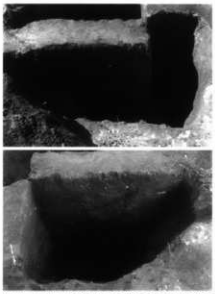




左上　土坑墓（東から）　右上　土坑墓 1 断面　左下　土坑墓 2（北西から）　右上　土坑墓 2　断面

図版 3

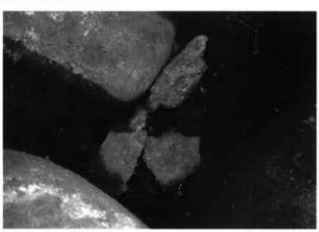
下北方19号地下式横穴墓

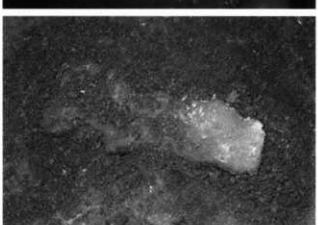


左上・左下　19号地下式横穴墓竪坑断面

右　19号地下式横穴墓礫床

19号地下式横穴墓遺物出土状況（頭位周辺）

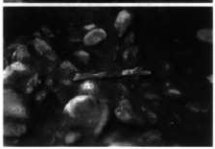




左上　19号地下式横穴墓遺物出土状況（小型丸底壺）
右上　19号地下式横穴墓遺物出土状況（鉄鏃）
左下　19号地下式横穴墓遺物出土状況（鉄鎌）

図版 5

下北方 2 号地下式横穴墓（南東から）

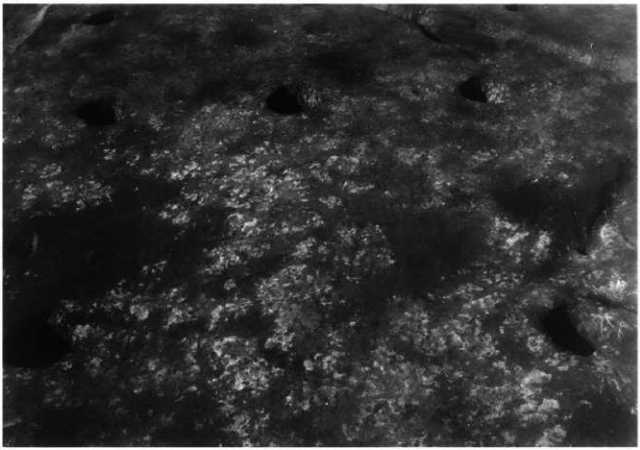


左　20号地下式横穴墓礫床　　右上・右下　20号地下式横穴墓遺物出土状況

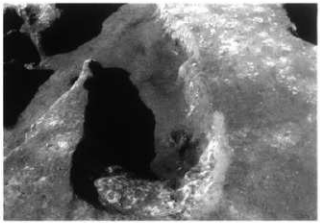
溝状遺構 1・2 完掘状況(東から)

左上・右上　溝状遺構 1 断面(左:b-b'、右:c-c'、東から)
左下　溝状遺構 2 断面(b-b'、東から)　　右下　溝状遺構 2 遺物出土状況(南東から)

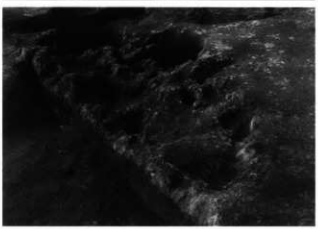
図版 7

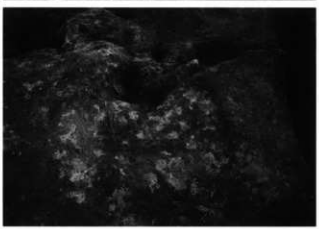


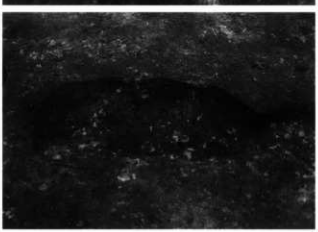
堀立柱建物 1 完掘状況(東から)

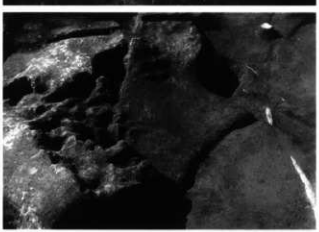


左　土坑 1 (北から)　　右上　土坑 4 完掘状況(北東から)　　右下　土坑 4 遺物出土状況(東から)

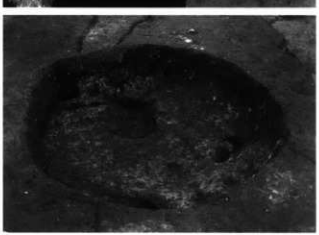




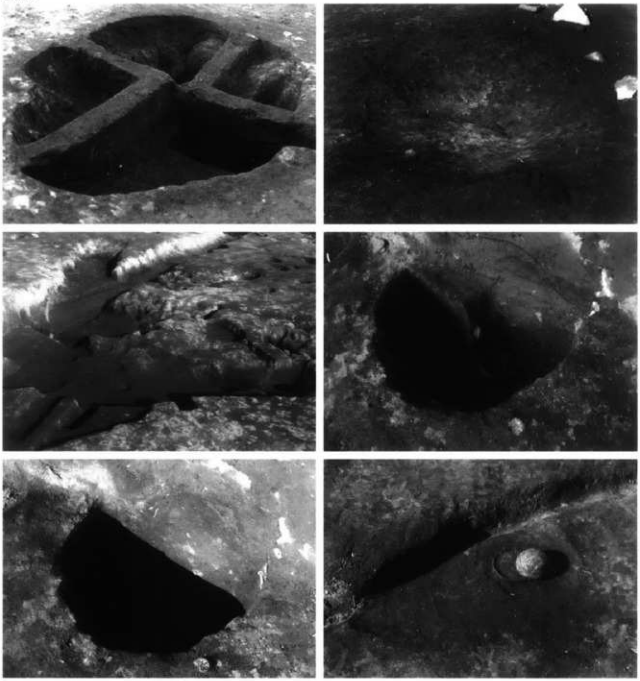




1段目左　土坑2断面(北から)
　　右　土坑5断面(南から)
2段目左　土坑6完掘状況(南東から)
　　右　土坑7完掘状況(東から)
3段目左　土坑8完掘状況(東から)
　　右　土坑10完掘状況(東から)
4段目右　土坑11完掘状況(東から)



図版 9

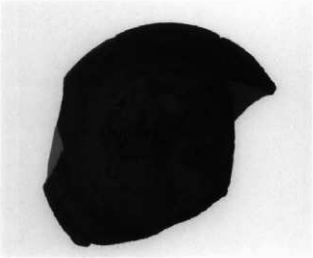


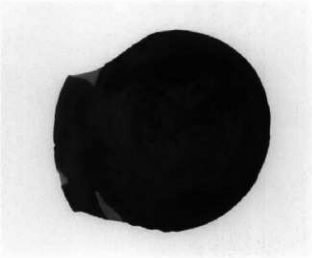
1 段目左　土坑12土層断面（南東から）
　　右　土坑13完掘状況（東から）
2 段目左　住居跡 1 完掘状況（南西から）
　　右　Pit 1 遺物出土状況（南東から）
3 段目左　Pit 1 完掘状況（南東から）
　　右　Pit 2 遺物出土状況（東から）
4 段目右　Pit 2 遺物出土状況（東から）

下北方19号地下式横穴墓出土土器

下北方20号地下式横穴墓出土土器

II区包含層出土高坏



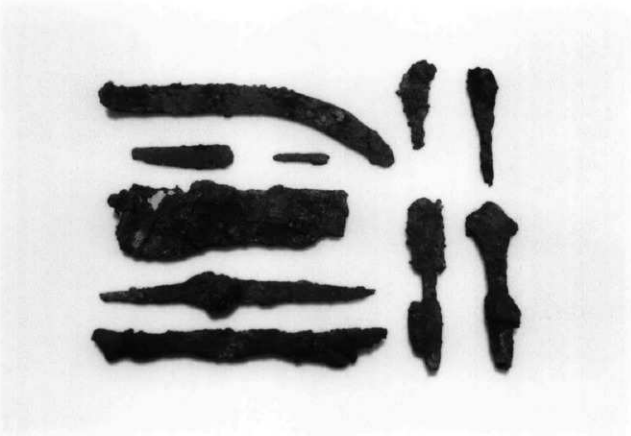


墨書土器

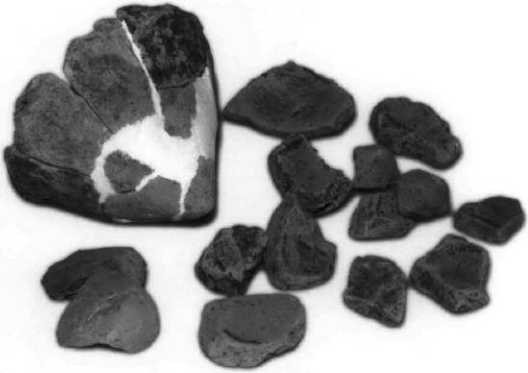
図版13

古代の土器

金床石・敲石



鉄製品



焼塩土器

瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもきたかたつかばるだい1いせき
署名	下北方塚原第1遺跡
副書名	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第78集
編集者名	西嶋　剛広
発行機関	宮崎市教育委員会
所在地	〒880-0805　宮崎市橘通1丁目14番地20号　TEL（0985）21－1836
発行年月	2010年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積
下北方塚原 第1遺跡	宮崎市下北方町塚原	45201	31°56′42″	131°46′48″	H.20.10.31 ～ H.20.12.25	395m²

調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集合住宅建築	散布地	古墳時代 古代	地下式横穴墓 溝状遺構	土師器 須恵器 鉄器 瓦	墳丘周辺以外から地下式横穴墓が検出された。また、2条の溝状遺構は道路状遺構の可能性がある。

宮崎市文化財調査報告書　第78集

下北方塚原第１遺跡

個人住宅建設に伴う
文化財発掘調査報告書

2010年3月

発　行　　宮崎市教育委員会